# 住吉宮町遺跡第46次発掘調査報告書

２００９年

神戸市教育委員会

# 住吉宮町遺跡第46次発掘調査報告書

２００９年

神戸市教育委員会

# 序

住吉の位置するいわゆる阪神間は、近代の都市化に伴い居住域としての需要が多く、殊に近年は住宅地としての人気がたかい地域です。

かつては昭和13年の大洪水や戦災、阪神淡路大震災など幾度となく惨禍に見舞われましたが、復興を遂げ、現在は賑わいと美しい町並みがもどってきました。

ＪＲ住吉駅周辺には、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡が、まちの下に埋まっているところで、住吉宮町遺跡と名付けられています。

今回の調査の成果のひとつとして古墳が１基発見されました。この古墳は、当遺跡で76基目の古墳となります。このような多数の古墳の造営は、古代からの開発が進んだ地域であることを示しています。

今述べた古墳以外にも多くの調査の成果がありました。当報告書が地域の歴史を知るための一資料として活用されることを希望いたします。

最後にこの報告書を刊行するにあたり、現地調査及び報告書作成作業にご理解ご協力いただいた株式会社ハウジングネットワークならびに関係諸機関に感謝いたします。

２００９年１２月２１日

神戸市教育委員会

# 例　言

1．本書は、神戸市東灘区住吉宮町７丁目16、19－１番で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
2．現地における調査は、平成20年11月21日から平成21年１月19日の期間で実施し、神戸市教育委員会文化財課　口野博史が担当した。
3．遺物整理作業は、平成21年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施し、文化財課　黒田恭正、佐伯二郎、口野が担当した。遺物写真の撮影は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　牛嶋　茂氏の指導の下、西大寺フォト　杉本和樹氏が行なった。
4．本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の１地形図「神戸首部」、「西宮」、神戸市発行の2,500分の１地形図、「住吉」の一部を使用した。
5．本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。
6．本書の執筆は、「第２章　調査の成果　出土遺物」の鉄製品については、文化財課　中村大介の助言の下、口野が執筆した。ただし「同章２．鉄剣に付着した木質」については、中村が執筆した。これ以外は口野が担当し、編集を行なった。また「第３章土壌分析」は、㈱パレオ・ラボがおこなった。出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。
7．発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、共同住宅建設の事業主である株式会社ハウジングネットワークに多大なるご協力をいただいた、記して感謝を申し上げます。

調査組織

平成20～21年度

神戸市文化財保護審議会　　史跡・考古資料担当
工楽　善通　　大阪府立狭山池博物館長
和田　晴吾　　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

| | |
|---|---|
| 教育長 | 橋口　秀志 |
| 社会教育部長 | 黒住　章久（平成20年度）・大寺　直秀（平成21年度） |
| 教育委員会参事（文化財課長事務取扱） | 柏木　一孝 |
| 社会教育部主幹（埋蔵文化財指導係長事務取扱） | 丸山　　潔（平成20年度） |
| 社会教育部主幹（埋蔵文化財センター所長事務取扱） | 渡辺　伸行 |
| 埋蔵文化財調査係長 | 千種　　浩 |
| 文化財課主査 | 丹治　康明 |
| 同 | 安田　　滋 |
| 同 | 斎木　　巌（平成21年度） |
| 事務担当学芸員 | 阿部　敬生（平成20年度） |
| | 中谷　　正 |
| 調査担当学芸員 | 口野　博史 |
| 保存科学担当学芸員 | 中村　大介 |
| 遺物整理担当学芸員 | 黒田　恭正（平成21年度） |
| | 佐伯　二郎（平成21年度） |

# 目　次

序
例言
第１章　調査に至る経過 …… 1
１．はじめに …… 1
２．歴史的環境 …… 3
３．既往の調査 …… 5
４．調査日誌抄 …… 9
第２章　調査の成果 …… 10
１．調査地 …… 10
２．基本層序 …… 10
３．調査の概要 …… 10
４．第１遺構面の遺構 …… 10
５．第２遺構面の遺構 …… 14
６．第３遺構面の遺構 …… 17
８．第１遺構面の出土遺物 …… 20
９．第２遺構面の出土遺物 …… 25
10．第３遺構面の出土遺物 …… 25
11．小結 …… 27
第３章　土壌分析 …… 28
１．サンプル採取 …… 28
２．プラント・オパール分析 …… 29
３．花粉分析 …… 31
第４章　まとめ …… 32

挿図、挿図写真等目次

第１図　調査地位置図 …… 1
第２図　周辺主要遺跡分布図 …… 2
第３図　住吉宮町遺跡既調査地及び調査地位置図 … 6
第４図　調査区断面図 …… 11
第５図　第１遺構面平面図 …… 12
第６図　SX103家形埴輪出土状況平面及び断面図 … 13
第７図　第２遺構面平面図 …… 15
第８図　墳丘列石立面図及び墳丘断面図 …… 16
第９図　第３遺構面平面図 …… 18
第10図　SK301平面及び断面図 …… 19
第11図　SK302平面及び断面図 …… 19
第12図　遺物包含層１（第１遺構面を覆う洪水砂）出土遺物実測図 …… 20
第13図　第１遺構面出土遺物実測図 …… 22
第14図　SX103出土家形埴輪実測図及び家形埴輪復元図 …… 24
第15図　遺物包含層２（古墳を覆う洪水砂）及び第２遺構面出土遺物実測図 …… 25
第16図　遺物包含層３（古墳形成層）及び第３遺構面出土遺物実測図 …… 26
第17図　土壌分析サンプル採取地位置図及び断面図 … 28
第18図　住吉宮町遺跡のプラント・オパール分布図 … 30
第19図　調査地周辺古墳群平面図 …… 33
第20図　調査地周辺時期別遺構面断面図 …… 35
表１　住吉宮町遺跡既往調査一覧表 …… 7
表２　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数 … 29
挿図写真１　調査地近景 …… 5
挿図写真２　調査作業風景 …… 9
挿図写真３　転石検出状況 …… 9
挿図写真４　古墳検出状況 …… 9
挿図写真５　現地説明会風景１ …… 9
挿図写真６　現地説明会風景２ …… 9
挿図写真７　遺物整理風景 …… 9
挿図写真８　木質付着状況 …… 21
挿図写真９　ヒノキ木口面 …… 21
挿図写真10　ヒノキ柾目面 …… 21
挿図写真11　撹乱坑にみえる耕起痕 …… 28
挿図写真12　サンプル採取作業状況 …… 28
挿図写真13　住吉宮町遺跡のプラント・オパール … 30
挿図写真14　住吉宮町遺跡の花粉分析プレパラート … 31
挿図写真15　南から調査地を望む …… 36

## 写真図版目次

カラー図版１　古墳検出状況南から、
古墳検出状況北から
カラー図版２　SX103出土家形埴輪写真

ＰＬ１　第１遺構面全景北から、第２遺構面土石流北から、第２遺構面土石流南から
ＰＬ２　SX103家形埴輪出土状況南から、
SX103同断割状況南から
ＰＬ３　東辺周溝洪水砂堆積状況北から、
南辺周溝内転石堆積状況東から
ＰＬ４　南辺周溝及び列石検出状況東から、
東辺周溝及び列石検出状況南から
ＰＬ５　古墳南東隅部北から、
古墳南東隅部南から
ＰＬ６　北辺周溝洪水砂堆積状況東から、
北辺周溝内須恵器坏出土状況東から
ＰＬ７　列石検出状況北東から、列石検出状況東から、列石検出状況南から
ＰＬ８　第３遺構面全景北から、
第３遺構面全景南から
ＰＬ９　SX301検出状況北から、
SK301遺物出土状況西から
ＰＬ10　SX303及びSK302検出状況西から、
SK302遺物出土状況西から
ＰＬ11　SD102遺物出土状況北東から、
SX103瑯出土状況、
墳丘上土坑検出状況南東から、
墳丘上土坑完掘状況南東から、
SX301石錐出土状況、
SX303石鏃出土状況
ＰＬ12　包含層１出土遺物写真、
SD102出土遺物写真、
包含層２出土遺物写真
ＰＬ13　出土鉄器類写真、
出土鉄器類レントゲン写真
ＰＬ14　SX102出土遺物写真、
SX103出土遺物写真、
SK201出土遺物写真、
墳丘上土坑出土遺物写真、
北辺周溝出土遺物写真
ＰＬ15　包含層３出土遺物写真、
SK301出土遺物写真、
SX303出土遺物写真
ＰＬ16　SK302出土遺物写真、
SK302出土石器写真、
第３遺構面出土石器写真

# 第１章　調査に至る経過

## １．はじめに

住吉宮町遺跡は、1985（昭和60）年にＪＲ住吉駅の南西で、共同住宅建設に伴い発見された遺跡である。大小さまざまな調査を重ね、今回の調査が46回目の第46次調査となる。

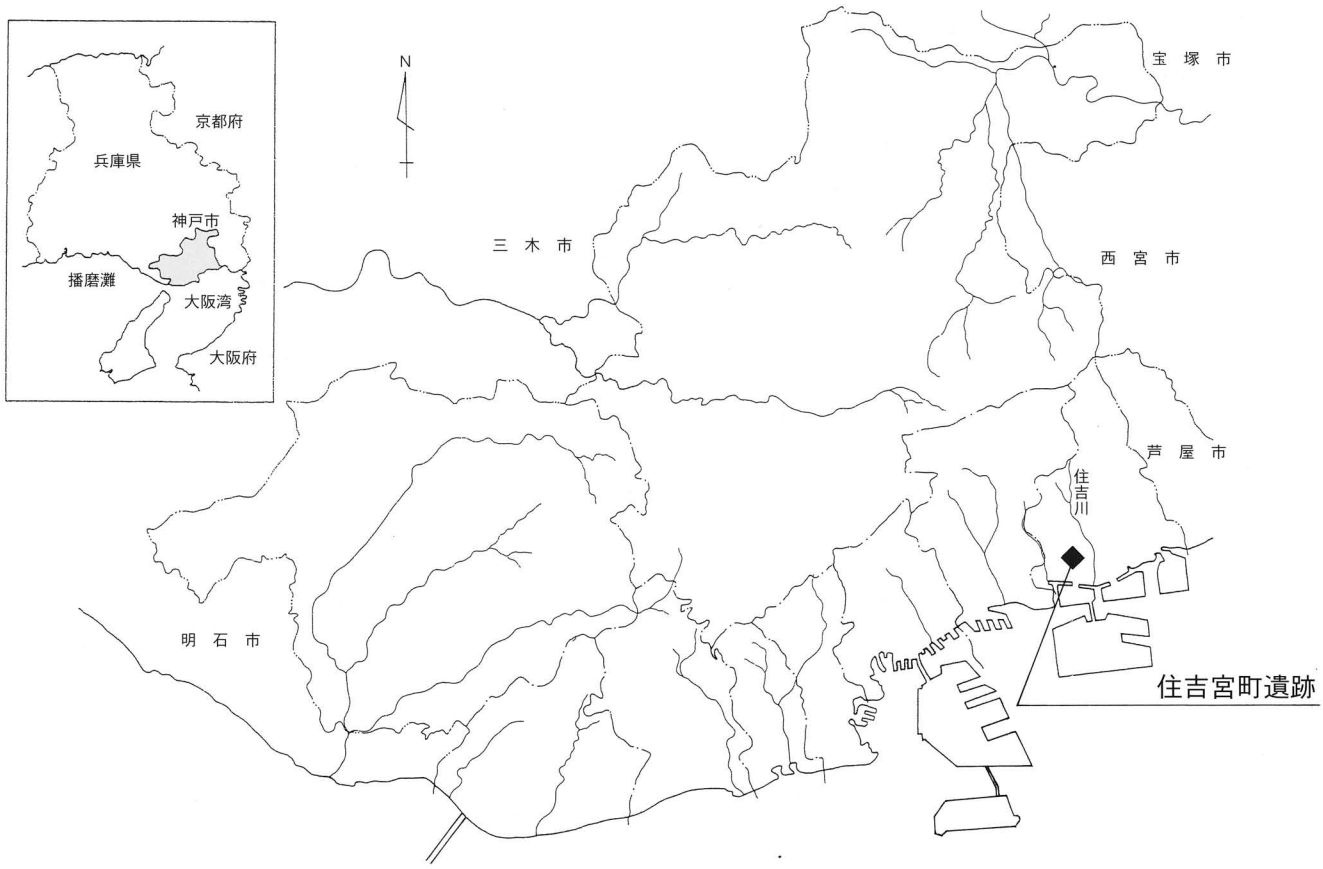
住吉宮町遺跡は、東西約800ｍ・南北約600ｍの範囲に国道２号線沿いに東西にひろがる遺跡である。六甲山から流れる石屋川や住吉川により形成された標高20ｍ前後の複合扇状地上に位置し、弥生時代から中世におよぶ複合遺跡である。

地形図をみると住吉宮町遺跡付近では、ＪＲ軌道と国道２号線の線形が平行に弧状を描いている。

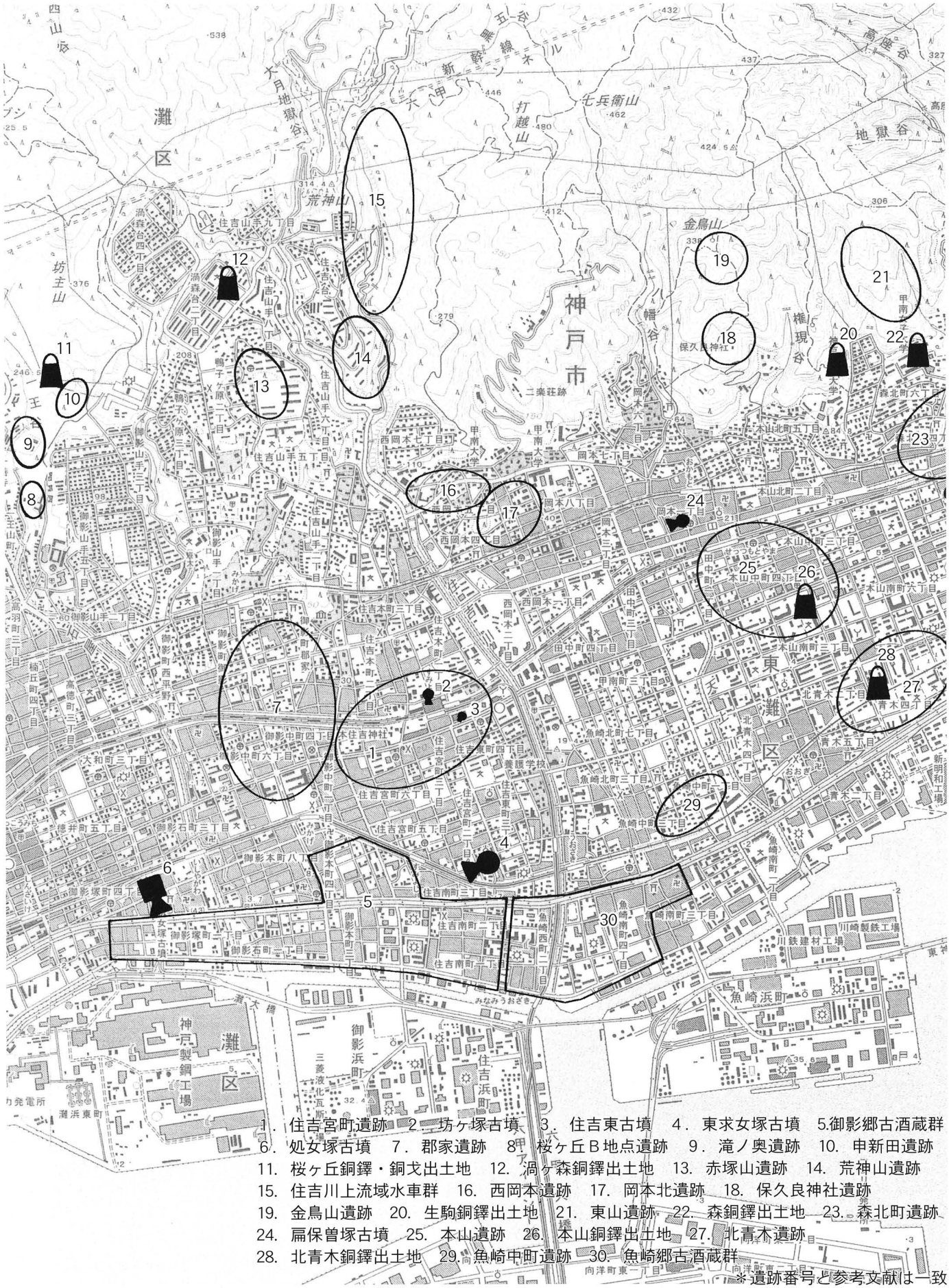
ＪＲ軌道の線形は1874（明治７）年開通時とほぼ同様で、また国道２号線の線形も西国街道さらに山陽道の奈良時代にまでさかのぼってもほぼ同様であろうと考えられる。

ＪＲ軌道が標高約25m、国道２号線標高約21mの等高線が描けるようで、この等高線の間は、北側や南側と比べると明らかに傾斜が緩やかになっている。この緩傾斜地を中心に遺跡は存在しているようである。

住吉宮町遺跡の特徴として昭和60年の第１次調査や駅周辺の再開発事業などで発見された古墳群があげられる。これまでに約70基の古墳が検出されている。この古墳の大部分は、一辺10m前後の方墳などで近接して築造された古墳群である。この古墳群はまもなく洪水砂によって地上に痕跡を残すことなく埋もれてしまう。




第１図　調査地位置図




1．住吉宮町遺跡　2．坊ケ塚古墳　3．住吉東古墳　4．東求女塚古墳　5.御影郷古酒蔵群
6．処女塚古墳　7．郡家遺跡　8．桜ケ丘Ｂ地点遺跡　9．滝ノ奥遺跡　10．申新田遺跡
11．桜ケ丘銅鐸・銅戈出土地　12．渦ケ森銅鐸出土地　13．赤塚山遺跡　14．荒神山遺跡
15．住吉川上流域水車群　16．西岡本遺跡　17．岡本北遺跡　18．保久良神社遺跡
19．金鳥山遺跡　20．生駒銅鐸出土地　21．東山遺跡　22．森銅鐸出土地　23．森北町遺跡
24．扁保曽塚古墳　25．本山遺跡　26．本山銅鐸出土地　27．北青木遺跡
28．北青木銅鐸出土地　29.魚崎中町遺跡　30．魚崎郷古酒蔵群

※遺跡番号と参考文献は一致

第２図　周辺主要遺跡分布図　Ｓ：１／25,000

さらに古墳群より古い弥生時代の周溝墓や竪穴住居なども発見されている。また古墳群と相前後する時代の竪穴住居やさらに新しい時代では、奈良時代の掘立柱建物や井戸なども発見されている。

このように六甲山南麓の地域では、背後に山を負い前面に海が広がる環境のもと、山、川、海からの恵沢と洪水による自然災害とたたかいながら、人々の生活は営み続けられてきた。また前面の大阪湾は、食料を得るだけでなく、重要な交通手段でもあった。古来より人々が生活をしていく上で整った生活環境にあり、数多くの遺跡が存在する地域である。次に周辺の遺跡を略述する。

## 2．歴史的環境

住吉宮町遺跡の周辺の遺跡として、遺跡の南に阪神住吉駅東側に東求女塚古墳４が存在する。古墳の墳丘は明治の半ば以降徐々に削りとられ、その姿は地上から姿を消すこととなってしまった。青銅鏡６面や玉類など発見され、現在東京国立博物館に所蔵されている。1982年の発掘調査により、全長約80m、後円部径約47m、前方部幅約42mの規模をもつ前方後円墳であることが判明した。

また南の海岸線には江戸時代から始まる酒造の生産遺跡として周知される御影郷古酒蔵群５、魚崎郷古酒蔵群30が存在する。

住吉宮町遺跡の約500m南には、古来悲恋伝説に名高い処女塚古墳６が存在する。全長約70m前方部幅約32m後方部幅約39mの規模をもつ前方後方墳である。東求女塚古墳と同様に海岸線に近い砂堆上に立地する古墳である。

郡家遺跡７は、阪急御影駅から阪神御影駅にかけて東西約500m、南北約1,000mの範囲に広がる遺跡である。弥生時代から中世および近世に至る石屋川や住吉川により形成された複合扇状地上にある遺跡で、住吉宮町遺跡と接する。これまでに83次にわたる調査を重ねる。弥生時代の円形周溝墓や古墳時代の水田、奈良時代の掘立柱建物、中近世遺構などが検出されている。

住吉宮町遺跡の北側、六甲山南麓にも多数の遺跡が知られている。山麓の尾根上では、弥生時代集落の桜ヶ丘Ｂ地点遺跡８、また滝ノ奥遺跡９は、平安時代の寺院や経塚が発見され、さらに旧石器時代有茎尖頭器なども出土している。縄文時代の石鏃などの散布する申新田遺跡10などがある。

14個の銅鐸と７本の銅戈が出土したことで知られる国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈の出土地11から、東の六甲山南麓には、渦ヶ森銅鐸出土地12、保久良神社遺跡（銅戈）18、生駒銅鐸出土地20、森銅鐸出土地22が知られる。これらの発見された銅鐸は、不時発見されたものである。その出土地は山麓部である。これらに対し本山銅鐸出土地26、北青木銅鐸出土地28は海岸に近い弥生時代の集落（本山遺跡25、北青木遺跡27）が営まれた付近である。上記の遺跡は、日本における有数の青銅器出土地域であり、弥生時代の社会を研究する上で重要な地域である。

同様に尾根上には、いずれも詳細は不明であるが、赤塚山遺跡13、荒神山遺跡14、金鳥山遺跡19、東山遺跡21など弥生時代中期から後期にかけてのいわゆる高地性集落が存在する。

これらに対し沖積地では弥生時代後期から古墳時代にかけて住吉宮町遺跡１、郡家遺跡７、岡本北遺跡17、森北町遺跡23、魚崎中町遺跡29などの集落が営まれる。

住吉川上流には、六甲山南麓の水流を利用して搾油、精米に利用された住吉川上流域

水車群15がある。この開始時期は江戸時代にさかのぼることが解明されてきた。また住吉川水系に連なる水車群に関連する遺構が西岡本遺跡16で検出されている。

森北町遺跡23は、弥生時代から古墳時代にかけての集落で、また７世紀代の棚田も検出されている。

扁保曽塚古墳24は、全長約64m、後円部径約31mの規模をもつ前方後円墳で、青銅鏡６面や玉類などが発見され、東求女塚古墳と同様に現在東京国立博物館に所蔵されている。

処女塚古墳、東求女塚古墳、扁保曽塚古墳は前期古墳として知られ、古墳時代中期の古墳として住吉宮町遺跡の坊ヶ塚古墳２、住吉東古墳３そして一辺10mから20mの方墳があげられる。

古墳時代後期の古墳として、郡家遺跡７、西岡本遺跡16、岡本梅林古墳、生駒銅鐸出土地20に近接する生駒古墳などが知られる。

魚崎中町遺跡29は、弥生時代終末期から古墳時代初期の円形周溝墓や古墳時代終末期から奈良、平安時代に連続する水田面や耕作痕が検出されている。

上記のように住吉宮町遺跡を取り巻く歴史的環境は、旧石器時代から近世に至るさまざまな時代さまざまの遺跡が存在する豊かな環境にある。


**歴史的環境参考文献**　（文献番号は周辺主要遺跡分布図番号と一致）

1～3　既往の調査履歴及び調査内容については本文７頁表１を参照

4　渡辺伸行「東求女塚古墳」昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1985

5　井尻格「御影郷波がえし蔵－御影郷古酒蔵群第２次発掘調査の記録－」神戸市教育委員会2004・黒田恭正「御影郷古酒蔵群第４次発掘調査報告書－共同住宅建設に伴う発掘調査－」神戸市教育委員会2007

6　「史跡処女塚古墳」神戸市教育委員会1985

7　既往の調査履歴及び調査内容については、最新刊の石島三和編「郡家遺跡第83次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2008本文８．９頁表２及び図５を参照

8　新修神戸市史編集委員会編「新修神戸市史」歴史編Ⅰ自然・考古神戸市1989

9　森田稔「滝ノ奥遺跡」昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1983・黒田「滝ノ奥遺跡」平成３年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994

10　８に同じ

11　三木文雄他「神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書」兵庫県文化財調査報告書第１冊兵庫県教育委員会1966、69

12　「住吉村新発見の銅鐸」兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書第十一輯兵庫県1935

13　８に同じ

14　「荒神山遺跡調査概報」神戸市教育委員会1970

15　井尻「住吉川上流域水車群八輌場水車群確認調査」平成18年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2009

16　浅岡俊夫編「神戸市東灘区西岡本遺跡」六甲山麓遺跡調査会2001・藤井太郎・中村大介「西岡本遺跡第４・５・６次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2009

17　浅岡俊夫編「神戸市東灘区岡本北遺跡」六甲山麓遺跡調査会1992

18　樋口清之「攝津保久良神社遺蹟の研究」験杉会紀要第四輯　國学院大学験杉会1942

19　石野博信「神戸市金鳥山遺跡－保久良神社、銅戈出土地点の裏山」古代学研究第48号古代学研究所1967

20　村川行弘「神戸市東灘区本山町中野字生駒出土銅鐸」考古学雑誌51－２　1965

21　宮本郁雄「本山町東山遺跡」昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1987・宮本「本山町東山遺跡－第３次調査－」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988

22　11に同じ

23　中居さやか・中村「森北町遺跡発掘調査報告書第20次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会2004

24　梅原末治「武庫郡本山村マンバイのヘボソ塚古墳」兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告書第二輯兵庫県1925・浅岡俊夫編「神戸市東灘区本山北遺跡」六甲山麓遺跡調査会1995

25　丹治康明・須藤宏「本山遺跡」平成元年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1992・安田滋「本山遺跡第17次調査」平成７年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1998

26　「本山遺跡第12次調査の概要」神戸市教育委員会1991

27　山下史朗編「北青木遺跡」兵庫県教育委員会1986・菅本宏明・石島「北青木遺跡発掘調査報告書－第３次調査－」神戸市教育委員会1999

28　東喜代秀・中村・前田佳久・須藤「北青木遺跡発掘調査報告書第５次調査」平成18年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2009

29　岩田明広「神戸市東灘区魚崎中町遺跡（第３次調査）」神戸市教育委員会1996

30　関野豊「魚崎郷古酒蔵群第１次調査」・佐伯二郎「魚崎郷古酒蔵群第２次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2001

## ３．既往の調査

1985年の遺跡の発見以来、大小さまざまな調査を重ね、当調査が第46次調査となる。それぞれの調査によって、多くの成果が得られている。調査原因は、共同住宅建設、再開発事業、個人住宅建設など様々である。

調査成果については表１に、また既往の調査地は第３図に示すとおりである。

また発見された古墳については、調査内容に列記した。

挿図写真１　調査地近景（南西から）

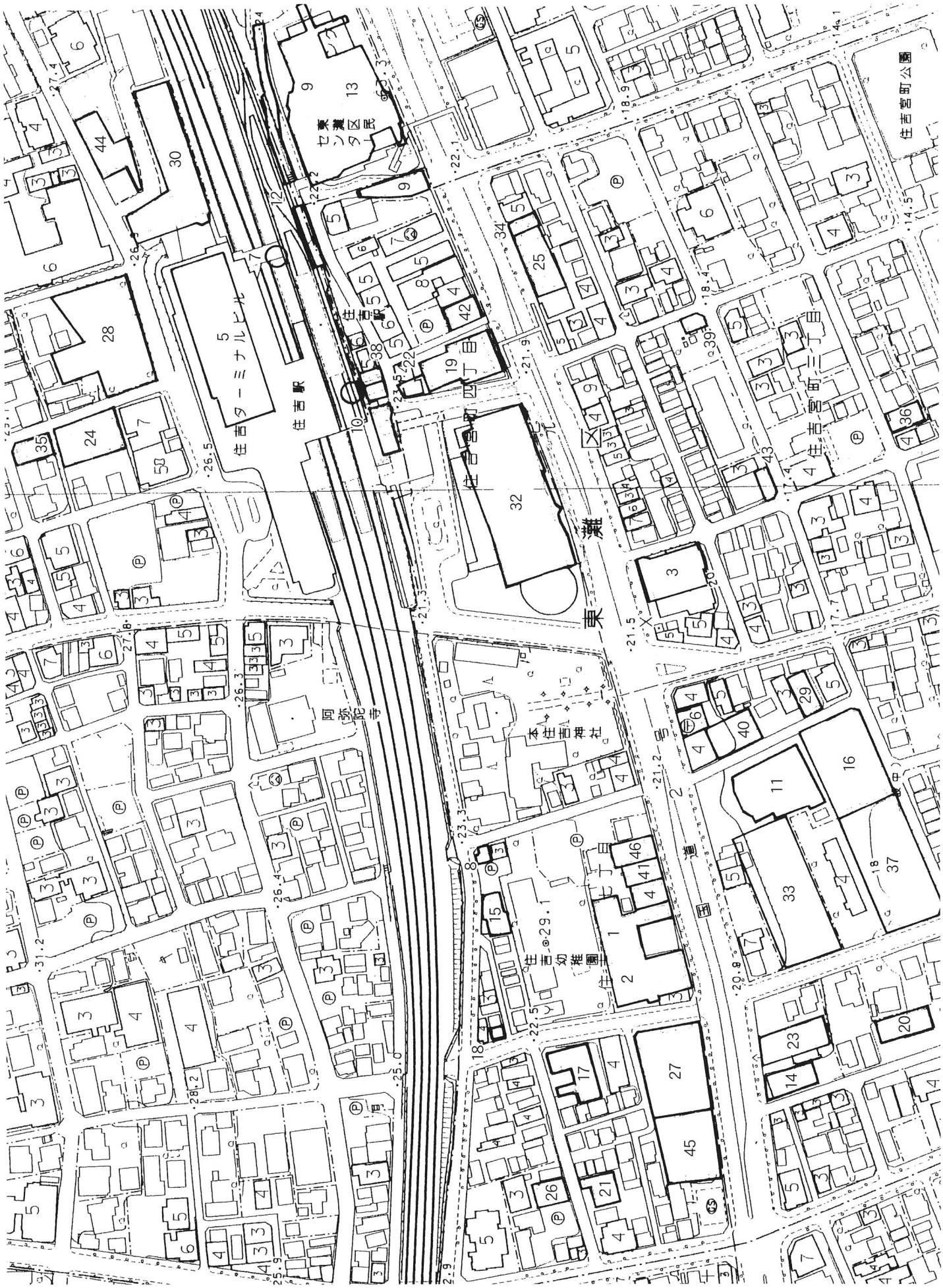

住吉宮町公園
住吉宮町三丁目
住吉宮町四丁目
住吉宮町公園
住吉宮町一丁目
住吉宮町二丁目
住吉宮町
住吉宮町
住吉宮町

表１　住吉宮町遺跡既往調査一覧表

| 次数 | 調査年度 | 調査地 | 調査機関 | 調査面積 ㎡ | 主な調査内容 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 85　S60 | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 500 | 古墳時代後期方墳３基・中世土坑 | 1 |
| 2 | 85　S60 | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 250 | 古墳時代後期方墳８基 | 2 |
| 3 | 85　S60 | 住吉宮町３ | 神戸市教育委員会 | 440 | 古墳時代・中世の溝 | 3 |
| 4 | 86　S61 | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 175 | 古墳時代箱式石棺３基、方墳１基・奈良時代溝 | 4 |
| 5 | 86　S61 | 住吉本町１ | 兵庫県教育委員会 | 4,300 | 弥生末周溝墓３基・方墳10基、円墳１基、箱式石棺２基 | 5 |
| 6 | 87　S62 | 住吉宮町６ | 兵庫県教育委員会 | 90 | 中近世土坑 | 15 |
| 7 | 87　S62 | 住吉本町１ | 兵庫県教育委員会 | 90 | 弥生末周溝墓２基・方墳１基、土器棺墓１基 | 6 |
| 8 | 87　S62 | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 30 | 中世柱穴 | 7 |
| 9 | 88　S63 | 住吉東町５他 | 神戸市教育委員会 | 3,200 | 弥生末周溝墓・方墳６基、帆立貝式古墳１基（住吉東古墳）竪穴住居17棟・奈良時代掘立柱建物９棟 | 8 |
| 10 | 88　S63 | 住吉本町１ | 兵庫県教育委員会 | 125 | 弥生後期土坑・方墳３基 | 6・9 |
| 11 | 88　S63 | 住吉宮町６ | 神戸市教育委員会 | 1,300 | 弥生中期竪穴住居２棟・弥生末竪穴住居５棟・9,11Ｃ掘立柱建物５棟、地鎮遺構 | 10 |
| 12 | 88　S63 | 住吉本町１他 | 兵庫県教育委員会 | 385 | 方墳２基・中世溝、石垣状遺構 | 9 |
| 13 | 89　H元 | 住吉東町５ | (財)神戸市スポーツ教育公社 | 165 | 古墳時代竪穴住居１棟、掘立柱建物１棟、方墳２基・奈良時代掘立柱建物２棟 | 11 |
| 14 | 90　H２ | 住吉宮町６ | 神戸市教育委員会 | 500 | 古墳時代竪穴住居２棟・奈良時代掘立柱建物２棟、井戸３基 | 12 |
| 15 | 92　H４ | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 50 | 中世遺物包含層、土石流 | 13 |
| 16 | 93　H５ | 住吉宮町６ | 神戸市教育委員会 | 275 | 古墳時代流路・平安時代掘立柱建物２棟、近世採石址 | 14 |
| 17 | 95　H７ | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 400 | 方墳８基、竪穴住居16棟、掘立柱建物７棟 | 15 |
| 18 | 95　H７ | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 16 | 横穴石室（古墳１基） | 15 |
| 19 | 95　H７ | 住吉宮町４ | 神戸市教育委員会 | 500 | 弥生後期土器溜・方墳３基、箱式石棺１基・平安時代掘立柱建物１棟 | 16 |
| 20 | 96　H８ | 住吉宮町６ | 神戸市教育委員会 | 280 | 古墳、飛鳥、奈良時代河道・石組遺構 | 16 |
| 21 | 96　H８ | 住吉宮町４ | 神戸市教育委員会 | 200 | 古墳後期竪穴住居１棟・古墳末竪穴住居２棟、掘立柱建物１棟・奈良掘立柱建物１棟 | 17 |
| 22 | 96　H８ | 住吉宮町４ | 神戸市教育委員会 | 100 | 古墳時代末溝、落ち込み・奈良時代ピット | 17 |
| 23 | 96　H８ | 住吉宮町６ | 神戸市教育委員会 | 350 | 奈良時代井戸、墨書土器 | 18 |
| 24 | 96　H８ | 住吉本町１ | 神戸市教育委員会 | 450 | 弥生末土器棺・方墳４基、箱式石棺 | 19 |
| 25 | 97　H９ | 住吉宮町３ | 神戸市教育委員会 | 500 | 弥生末竪穴住居１棟・古墳掘立柱建物２棟・中世墓 | 20 |
| 26 | 97　H９ | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 100 | 古墳竪穴住居１棟、奈良掘立柱建物１棟 | 21 |
| 27 | 97　H９ | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 900 | 弥生竪穴住居１棟・古墳時代土坑墓１基、溝 | 22 |
| 28 | 97　H９ | 住吉本町１ | 神戸市教育委員会 | 360 | 葺石、周溝（坊ケ塚古墳） | 23 |
| 29 | 97　H９ | 住吉宮町６ | 神戸市教育委員会 | 120 | 中世溝、土坑 | 24 |
| 30 | 97　H９ | 住吉本町１ | 神戸市教育委員会 | 765 | 弥生中期溝・弥生末溝・方墳６基、箱式石棺１基、竪穴住居１棟・古代～中世掘立柱建物２棟 | 25 |
| 31 | 97　H９ | 住吉本町１ | 神戸市教育委員会 | 300 | 中世掘立柱建物１棟・石組遺構 | 26 |
| 32 | 98　H10 | 住吉宮町４ | 神戸市教育委員会 | 3,260 | 弥生後期竪穴住居６棟・方墳９基,円墳１基,箱式石棺９基 | 27 |
| 33 | 98　H10 | 住吉宮町６ | 兵庫県教育委員会 | 1,300 | 弥生末古墳初頭竪穴住居９棟・奈良平安掘立柱建物２棟 | 28 |
| 34 | 98　H10 | 住吉宮町３ | 神戸市教育委員会 | 40 | 弥生後期土坑・古墳後期柱列・奈良旧河道 | 29 |
| 35 | 01　H13 | 住吉本町１ | 神戸市教育委員会 | 170 | 方墳１基、葺石、埴輪列 | 30 |
| 36 | 01　H13 | 住吉宮町３ | 神戸市教育委員会 | 150 | 古墳時代後期竪穴住居１棟 | 31 |
| 37 | 02　H14 | 住吉宮町６ | 神戸市教育委員会 | 900 | 弥生末土坑・古墳後期溝・平安掘立柱建物１棟、溝、土坑 | 32 |
| 38 | 03　H15 | 住吉宮町４ | 神戸市教育委員会 | 80 | 方墳（１基・第10次調査３基の内１基） | 33 |
| 39 | 04　H16 | 住吉宮町３ | 神戸市教育委員会 | 20 | 古墳時代後期竪穴住居１棟、掘立柱建物２棟 | 34 |
| 40 | 05　H17 | 住吉宮町６ | 神戸市教育委員会 | 200 | 古墳後期竪穴住居１棟・平安掘立柱建物１棟・近世採石址 | 35 |
| 41 | 05　H17 | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 15 | 弥生末土坑 | 36 |
| 42 | 06　H18 | 住吉宮町４ | 神戸市教育委員会 | 180 | 方墳１基、掘立柱建物１棟 | 37 |
| 43 | 06　H18 | 住吉宮町３ | 神戸市教育委員会 | 60 | 弥生末溝・古墳後期竪穴住居１棟 | 37 |
| 44 | 06　H18 | 住吉本町１ | 神戸市教育委員会 | 70 | 方墳２基、埋甕１基、落ち込み１基 | 37 |
| 45 | 08　H20 | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 427 | 古墳後期竪穴住居９棟、掘立柱建物３棟、水田 | |
| 46 | 08　H20 | 住吉宮町７ | 神戸市教育委員会 | 220 | 方墳１基・弥生時代土坑 | 本書 |

復興支援

31　第31次調査のみ挿図内に入らず

既往調査参考文献一覧　　＊文献末尾番号が調査次数


1　西岡誠司・山本雅和「住吉宮町遺跡－第１次調査－」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988　1
2　山本「住吉宮町遺跡－第２次調査－」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988　2
3　口野博史「住吉宮町遺跡－第３次調査－」昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1988　3
4　山本「住吉宮町遺跡－第４次－」昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1989　4
5　渡辺昇・高瀬一嘉「坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）」兵庫県教育委員会1989　5
6　渡辺昇「住吉宮町遺跡群Ⅰ（坊ヶ塚遺跡）」兵庫県教育委員会1989　7・10
7　西岡「住吉宮町遺跡第５次（調査一覧表）」昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1990　8
8　丹治康明・須藤宏・東喜代秀「住吉宮町遺跡第９次調査」昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994　9
9　西口圭介・久保弘幸
「住吉宮町遺跡発掘調査報告書－住吉南線一部新設工事及び住吉駅ビル建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」
兵庫県教育委員会1991　10・12
10　丸山潔・須藤・松林宏典「住吉宮町遺跡第11次調査」神戸市教育委員会1990
丸山・須藤・松林「住吉宮町遺跡第11次調査」昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1994　11
11　橋詰清孝「住吉宮町遺跡」平成元年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1992　13
12　丹治・山本・谷正敏・池田毅・橋詰「住吉宮町遺跡」平成２年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1993　14
13　内藤俊哉「住吉宮町遺跡第15次調査（調査一覧表）」平成４年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1995　15
14　谷「住吉宮町遺跡第16次調査（調査一覧表）」平成５年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1996　16
15　小野田義和・秦憲二
「住吉宮町遺跡（第17次・第18次調査）－阪神・淡路大震災復興に伴う発掘調査－」神戸市教育委員会1998
小野田・秦「住吉宮町遺跡第17次調査・第18次調査」平成７年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1998　17・18
16　小野田・目次謙一・岸岡貴英・大西貴夫
「住吉宮町遺跡（第19次・第20次調査）－阪神・淡路大震災復興に伴う発掘調査－」神戸市教育委員会2001
小野田・目次・岸岡・大西
「住吉宮町遺跡第19次調査・第20次調査」平成８年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1999　19・20
17　川上厚志「住吉宮町遺跡第21次調査」・「住吉宮町遺跡第22次調査」
平成８年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1999　21・22
18　菊池逸夫・神野信「住吉宮町遺跡第23次調査」平成８年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1999　23
19　安田滋・菅本宏明・千種浩・中村大介・平田朋子
「住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2001
安田「住吉宮町遺跡第24次調査」平成８年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会1999　24
20　内藤「住吉宮町遺跡第25次調査」平成９年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000　25
21　浅谷誠吾「住吉宮町遺跡第26次調査」平成９年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000　26
22　西岡・関野豊「住吉宮町遺跡第27次調査」平成９年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000　27
23　菅本「坊ヶ塚古墳試掘調査」平成９年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000　28
24　阿部敬生「住吉宮町遺跡第28次調査」平成９年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000　29
25　菅本・平田「住吉宮町遺跡第29次調査」平成９年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000　30
26　内藤「住吉宮町遺跡第30次調査」平成９年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000　31
27　安田・菅本・千種・中村・平田「住吉宮町遺跡第24次・第32次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2001
安田・菅本・中村・平田「住吉宮町遺跡第31次調査」平成９年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2000　32
28　服部　寛・寒川　旭「住吉宮町遺跡第33次調査」兵庫県教育委員会2002　33
29　関野「住吉宮町遺跡第33次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2001　34
30　阿部「住吉宮町遺跡第35次調査」平成13年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2004　35
31　東・阿部功「住吉宮町遺跡第36次調査」平成13年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2004　36
32　井尻格・中村「住吉宮町遺跡第37次発掘調査報告書」神戸市教育委員会2003
井尻「住吉宮町遺跡第37次調査」平成14年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2005　37
33　中居さやか「住吉宮町遺跡第38次調査」平成15年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2006　38
34　浅谷「住吉宮町遺跡第39次調査」平成16年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2007　39
35　中谷正「住吉宮町遺跡第39次調査」平成17年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2008　40
36　中居「住吉宮町遺跡第41次調査（調査一覧表）」平成17年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2008　41
37　富山直人・須藤・中谷
「住吉宮町遺跡第42次調査・第43次調査・第44次調査」平成18年度神戸市埋蔵文化財年報神戸市教育委員会2009　42・43・44

4．調査日誌抄

1．調査に至る経過

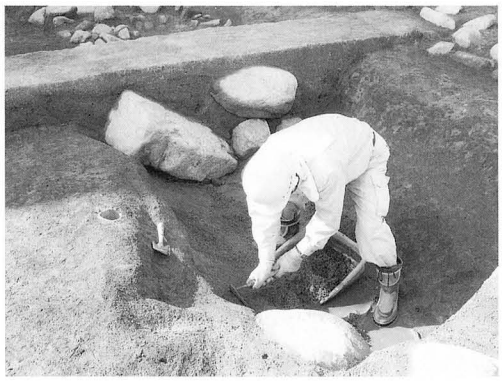
2008, 09, 17　文化財保護法に基づく届出
2008, 10, 09　試掘調査
　　発掘調査のための事前協議
2008, 11, 21　現地発掘調査着手

2．調査経過

2008, 11, 21　重機掘削残土搬出作業開始

挿図写真２　調査作業風景

2008, 11, 25　人力掘削開始
2008, 12, 04　第１遺構面全景写真撮影
2008, 12, 08　基準点測量実施



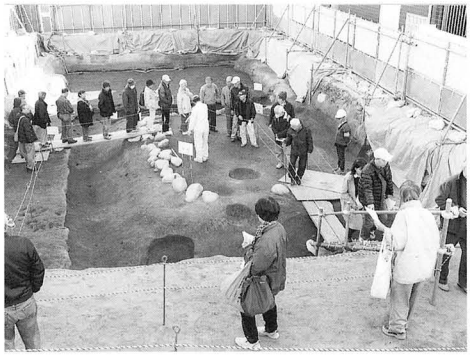
挿図写真３　転石検出状況

2008, 12, 16　土石流による転石を重機にて
　　場外搬出作業

挿図写真４　古墳検出状況

2008, 12, 19　第２遺構面　古墳　全景写真撮影

挿図写真５　現地説明会風景１



挿図写真６　現地説明会風景２

2008, 12, 20　現地説明会開催参加者60名
2008, 12, 25　分析用土壌サンプリング
2009, 01, 14　第３遺構面全景写真撮影
2009, 01, 16　土壌水洗作業
2009, 01, 19　現地調査完了

3．遺物整理

2009, 07, 21　遺物整理開始
　　埋蔵文化財センターにて

挿図写真７　遺物整理風景

## 第２章　調査の成果

### １．調査地

調査対象地は、第３図既調査地及び調査地位置図のように、第１次調査地の東側にあたり、第１次調査地、第４次調査地、第41次調査地、今回調査地となり国道２号線に面して並んだ状態である。第41次調査地に西接する。また東側の道路を挟んで本住吉神社の境内となる。調査範囲は、国道２号線に面した東西約10.5m、南北約20m、約210㎡の矩形の調査区である。

### ２．基本層序

基本層序は、上層から現代盛土層、淡灰色砂泥層（旧耕土）、赤褐色泥砂層（旧床土）、褐色泥砂層（中世以前の洪水砂）、茶褐色泥砂層（奈良時代から中世の堆積）、黄色粗砂（古墳時代から奈良時代の洪水砂）、黒灰色泥砂層（弥生時代遺物包含層）、黄褐色混礫粗砂層（弥生時代以前の堆積土）となる。茶褐色泥砂層、黄色粗砂、黒灰色泥砂層を取り除いたそれぞれの面が第１遺構面、第２遺構面、第３遺構面となる。遺構面の標高は、第１遺構面20.5m前後、第２遺構面20m前後、第３遺構面約19.5m前後である。

### ３．調査の概要

遺構面は、前述のように３面検出された。第１遺構面では、溝状遺構２条、土坑４基、落ち込み状遺構４箇所、ピット３箇所が検出された。第２遺構面では、方墳１基が検出され、古墳の墳丘に切り込んだ土坑SK201やピット201、調査区南端部で溝状遺構SD201が検出された。第３遺構面では、土坑２基、ピット６基、落ち込み状遺構３基が検出された。

調査の最終の段階で、下層の遺構、遺物の有無を確認するため第３遺構面を断ち割り調査を実施した。その結果、下層からは遺構、遺物は検出されなかった。

遺物量は第１遺構面では、28ℓ入コンテナボックス５箱、第２遺構面では、同ボックス２箱第２遺構面では、同ボックス２箱の計９箱であった。

出土遺物は現地作業終了後、神戸市埋蔵文化財センターに搬入し整理作業を実施した。遺物の水洗作業と平行して鉄器類などの遺物とを選別し、土器類は必要な注記作業をへて、復元作業、遺物実測作業を行った。その後それぞれの遺物に応じて石膏による補強、復元作業さらに色付け作業を行った。鉄器はレントゲン撮影後、銹除去作業、実測作業、防銹処置を行った。また報告書掲載に必要な遺物写真撮影を行うと同時に層位、遺構ごとに整理し上記コンテナボックスに収納し、現在神戸市埋蔵文化財センターに保管している。

### ４．第１遺構面の遺構

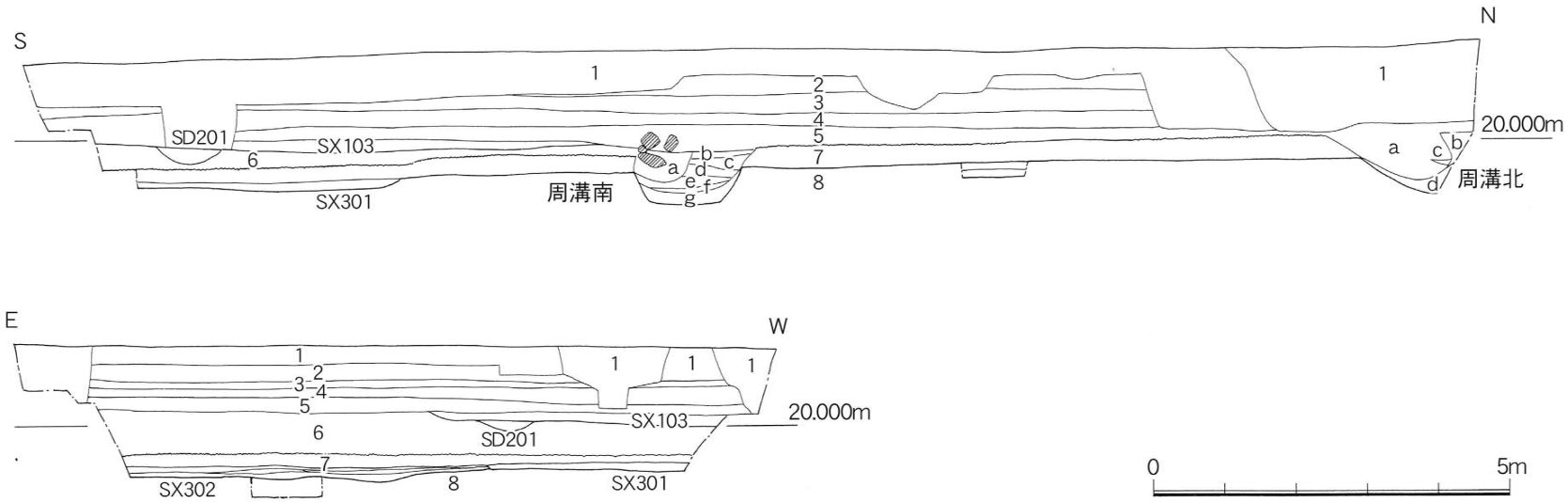
調査区北部では、溝状遺構SD102、土坑SK101～104、ピットP101・P103、落ち込み状遺構SX101・102・104が検出された。調査区南部の大半をSX103がしめ、ほかに溝状遺構SD101とピットP102が検出された。

#### １．SD102

SD102は、調査区北端から中央部にかけて南北方向に検出された溝状遺構である。幅約1.4m、深さ約0.2mの規模で、SK101やSX101に切られ、南端部はSX103に流れ込む。土師器、須恵器片、土錘などが出土した。出土した土師器甕片から奈良時代頃の遺構と考えられる。

#### ２．SK101

SK101は、長径1.1m、短径0.9m、深さ約0.4mの土坑である。出土遺物から奈良時代頃の遺構と考えられる。




第４図　調査区断面図

上段　西壁断面実測図　　下段　南壁断面実測図

1　現代盛土層　2　淡灰色砂泥層（旧耕土）　3　赤褐色泥砂層（旧床土）

4　褐色泥砂層（中世以前の洪水砂）　5　茶褐色泥砂層（奈良時代から中世の堆積）

6　黄色粗砂（古墳時代から奈良時代の洪水砂）7　黒灰色泥砂層（弥生時代遺物包含層）

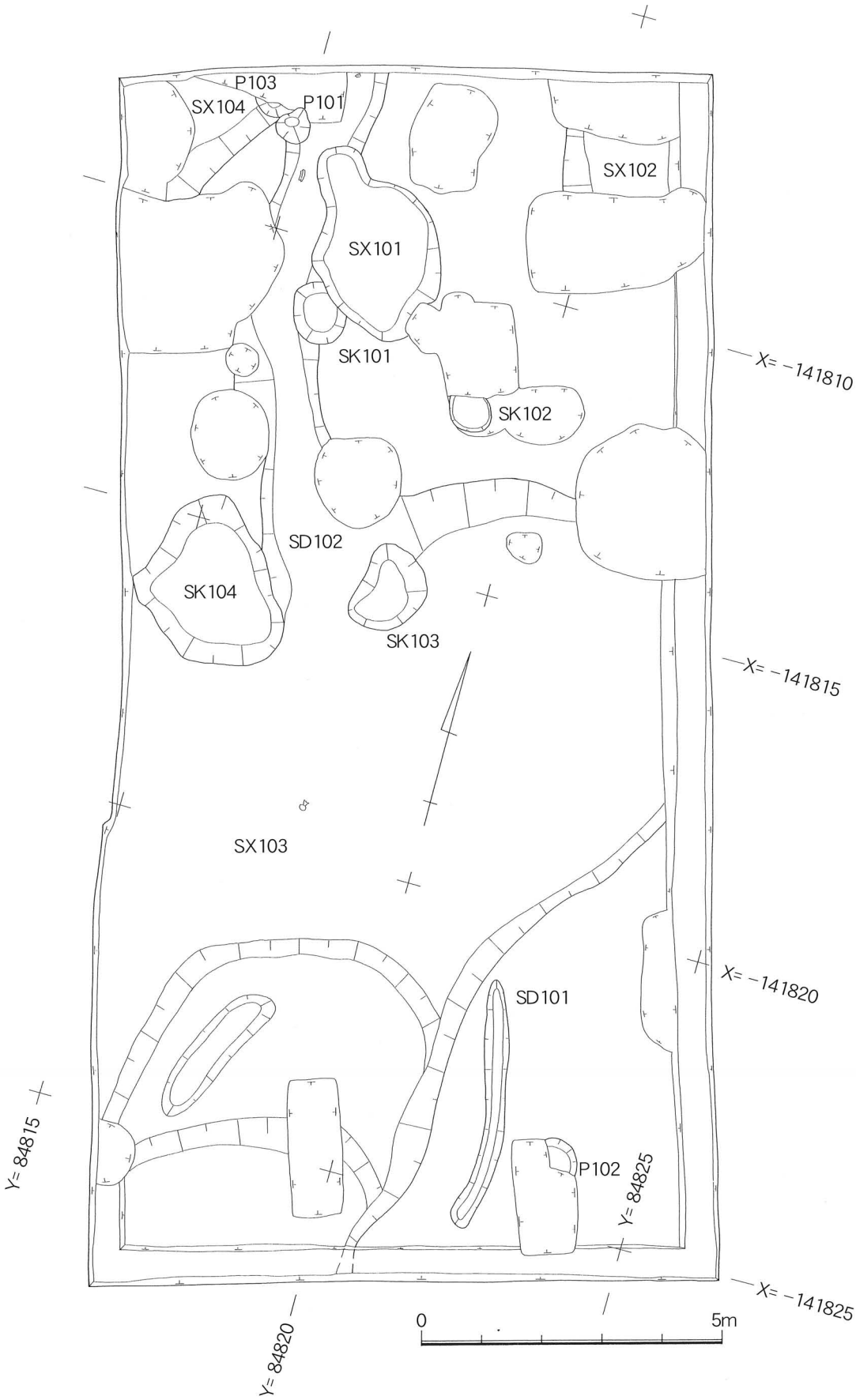
8　黄褐色混礫粗砂層（弥生時代以前の堆積土）

SX103　茶褐色泥砂　SD201　灰色泥砂

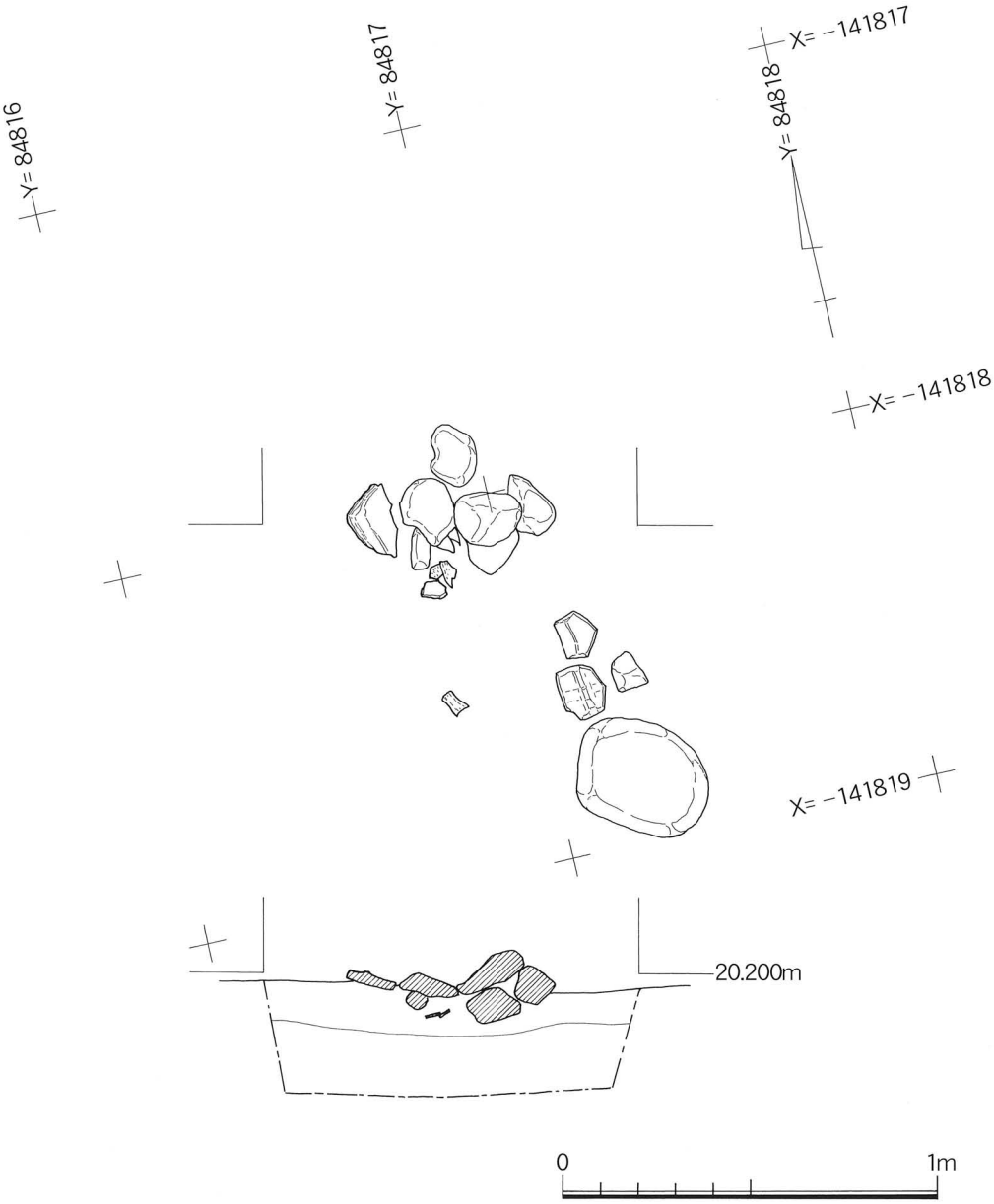
周溝　北　a 黄色粗砂 b 黒灰色泥砂 c 黄色泥砂 d 黒褐色泥砂

周溝　南　a 黄色混礫粗砂 b 黄色細砂 c 黄色粗砂 d 黄色砂 e 黄色粗砂 f 黄褐色混礫泥砂 g 黒褐色泥砂

SX301　淡灰褐色砂泥　SX302　a 淡褐色砂泥 b 黄色微砂 c 褐色泥砂




第５図　第１遺構面平面図




第６図　SX103家形埴輪出土状況平面及び断面図

３．SK102　　SK102は、直径0.7m、深さ約0.2mの円形土坑である。遺構内堆積土は周囲の遺構と異なり、青灰色の砂層が堆積していた。少量の土師器と染付け陶器片が出土した。近世に属する遺構と考えられる。

４．SK103　　SK103は、長径1.4m、短径1.0m、深さ約0.3mの不整形の土坑である。遺物は微量であった。

５．SK104　　SK104は、長径2.8m、短径2.0m、深さ約0.3mの不整形の土坑である。奈良時代の土師器、須恵器片とともに古墳時代須恵器片、埴輪片、弥生土器片が出土している。SK103、SK104ともにSD102を切って検出されている。

６．SX101　　SX101は、南北3.4m、短径2.1m、深さ約0.3mの不整形の落ち込み状遺構である。出土した土師器、須恵器片から奈良時代頃の遺構と考えられる。

７．SX102　　SX102は、西辺以外は撹乱坑により平面形は不明である。深さ約0.3mの落ち込み状遺構で、東に向かってやや浅くなっていく。

８．SX103　　SX103は、調査区中央部、北東方向から南西方向に堆積した洪水砂層である。幅約5.2m、調査区南端部での深さは約0.4mである。古墳時代から奈良時代の土師器、須恵器片や家形埴輪片、完形に近い鬼、鉄剣片、刀子、釘など多量の遺物が出土した。

9．SX104　　SX104も同様に東辺以外は撹乱坑により平面形は不明で、深さ約0.2mの落ち込み状遺構である。古墳時代後期の須恵器壺の口頸部が出土している。

10．SD101　　調査区南部では、SD101、P102、SX103が検出された。SD101は、幅約0.3m、深さ約0.1mの南北方向に検出された溝状遺構である。少量の土師器、須恵器片が出土した。

11．ピット　　P101は直径約0.6m、深さ約0.3mのピット、P103は直径約0.5m、深さ約0.3mのピットでそれぞれ微量の出土遺物からは時期については不詳であるが、層位と切りあい関係から奈良時代頃と考えられる。

P102は直径約0.8m、深さ約0.1mのピットと考えられるが、その大半は撹乱坑によって損なわれていた。少量の土師器片が出土した。

5．第2遺構面の遺構

第1遺構面のSX101からSK102にかけて、北西から南東の方向に幅約3m、長さ約8mの人頭大の礫を含む土砂流が検出された。これを取り除くと前述のように調査区北辺で、SK201、P201と古墳の列石がL字状に検出された。

1．古墳以外の遺構　SK201は、長径1.2m、短径0.6m、深さ約0.3m楕円形の土坑である。P201は直径約0.5m、深さ約0.4mの柱穴状の遺構である。他に柱穴状の遺構は検出されなかったため、建物などの一部であるかどうかその性格については不明である。調査区南端部でSD201が検出された。幅約0.6m、深さ約0.1mの溝状遺構である。それぞれの遺構から少量の土師器、須恵器片が出土した。奈良時代頃の遺構と考えられる。

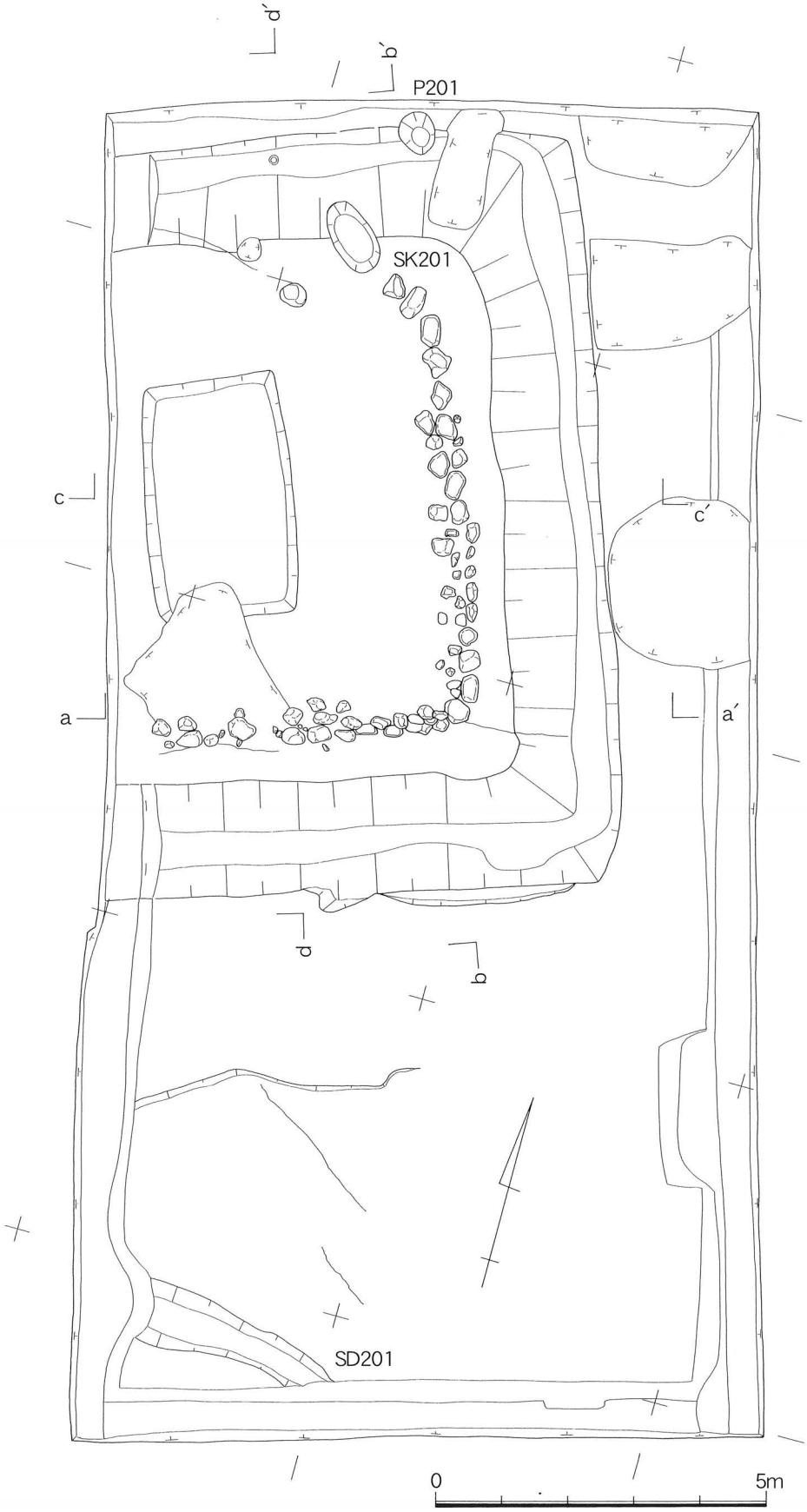
2．古墳　　調査区北半で、列石を持つ方墳が1基検出された。住吉宮町遺跡で検出された通算76基目の古墳となり、方墳としては、73基目である。列石もしくは葺石を持つ方墳としては、18基目となる。古墳西側については、調査区外で不明であるが、古墳の規模は、北辺周溝裾から南辺周溝裾で10.5m、全体規模で11.5mとなる。

墳丘および周溝は洪水砂に覆われ、墳丘の上面は損なわれており、墳丘の高さは不明である。現状で周溝底部から墳丘面までの高さは0.7mである。古墳の南北軸は、N18°Wとやや西にふれている。以上の諸点は第1・2次調査の古墳と同様の特徴がみられる。墳丘に樹立された埴輪などはなく、また樹立した痕跡も検出されなかった。

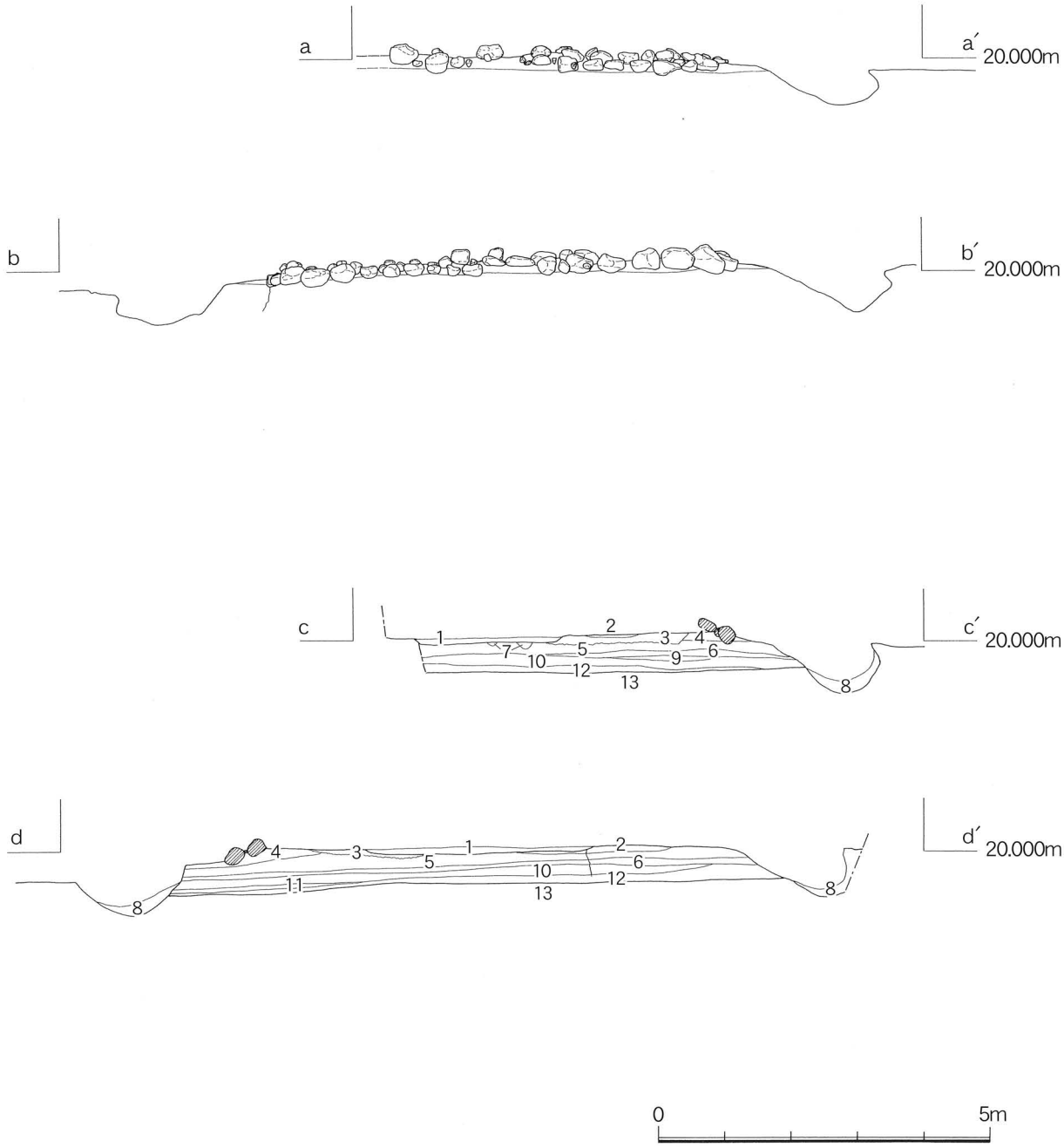
墳丘中央で、南北3.7m、東西2.2m、深さ約0.1mの規模で、墳丘を構成する土壌と異なる砂質を多く含む部分が検出された。古墳の南北中心軸にほぼ沿う状態で検出された。少量の土師器、弥生土器と須恵器1片が出土した。しかしながら墓壙として特筆すべき遺物や施設はなかった。76基検出された古墳で墓壙が確認できるものは現状では僅かである。

上記土坑内からは、前述のように弥生土器をはじめ土師器、須恵器が出土した。土坑そのものは墳丘を構成する土壌と異なる土壌があり、遺構として掘削することができた。しかしながらおそらく土坑として掘削された痕跡に墳丘直上を覆う洪水砂が堆積したものと考えられる。このため図示したように奈良時代と考えられる土師器甕47などの遺物が混じることとなったと考えられる。

列石は墳丘の北辺では1個のみで、東辺と南辺で列石が検出された。北辺の列石が損なわれたのは、前述の土砂流によるものであろう。列石は約70個で、うち3個は現地での観察により変成岩2個と流紋岩1個でその他残りは花崗岩である。この花崗岩のうち2個は風化が著しいものであった。列石の大きさは大人が一抱えできる径0.4～0.5mのものから人頭大のもので構成されている。列石は、石の長軸を周溝に併行して配置し、




第７図　第２遺構面平面図




第８図　墳丘列石立面図及び墳丘断面図

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 黄褐色細砂（土坑） | 6 | 黄褐色泥砂 | 11 | 淡茶褐色泥砂 |
| 2 | 明褐色泥砂 | 7 | 黄褐色砂（ブロック状に） | 12 | 黄褐色粗砂 |
| 3 | 淡褐色泥砂 | 8 | 黒褐色泥砂（小礫を含む） | 13 | 黄色混礫粗砂 |
| 4 | 淡褐色泥砂（粗砂混） | 9 | 黄褐色泥砂（マンガン沈着） | | |
| 5 | 黒灰色泥砂 | 10 | 暗褐色泥砂（マンガン沈着） | | |

東南部分では二段に配置しているように観察される。東南、および東北隅部には比較的大きい石を配置し、隅部を意識して築造している。列石と周溝の間に0.5mほどの犬走り状の空間が存在する。南辺列石と東辺列石を比較すると東辺が南辺に比べやや密度が疎で石材がやや大きいことがわかる。

周溝内は洪水砂が覆っていたが、南辺および東辺の一部には、人力では場外搬出不可能な直径１m前後の大きな転石が10個ほど検出された。これらの転石は機械力を使用して場外搬出をおこなった。周溝は断面逆台形に掘削されたと考えられるが、後の洪水によって特に東辺周溝の外側は抉られてしまっている。南辺の断面から上面幅1.8m、下面幅1.0m、深さ0.7mである。

周溝を直角に跨いで墳丘内へ立ち入ると周溝の深さと勾配が障害となり、立ち入り難い。しかしながら北東と南東隅部の周溝は、やや浅くなっている。このためこの部分を利用すると高低差が少なく、古墳へ立ち入ることが比較的たやすくなる。北辺、東辺、南辺と周溝を掘削する作業の分担もしくは分割があったことも考えられる。

周溝底部は、礫を含む粗砂まで掘削されており、調査期間中の降雨においても周溝に雨水が溜まることはなかった。上記のことから水を溜める機能をもつ溝ではなく、あくまで区画、境界としての機能をもったものであろう。

北辺周溝底で拳大の礫とともに須恵器坏身が正位置で１個出土した。坏内からは何も検出されなかった。出土状況から当初の位置を保ったものではないようである。周溝内からの出土遺物はこの須恵器のみで、洪水による影響であろうか古墳に供献されたであろう遺物は検出されなかった。

他に墳丘北西端と南東端には約２mの噴砂が検出された。また調査区南部でも、北西～南東方向に長さ約2.5mと約１mの噴砂が検出された。

6．第３遺構面の遺構

土坑２基、ピット６基、落ち込み状遺構３基が検出された。南部ではSX301とSX302が検出された。調査の最後段階には遺構面の断ち割り調査を実施した。調査内容からは相対的に南半は、北半に比べ安定していない土壌のようである。

1．SX301　SX301は南北4.4m、東西3.6m、深さ0.2mの楕円形の落ち込み状遺構で、遺構内北側でピット３基が検出された。少量の弥生土器と石錐片が出土した。

2．SX302　SX302も南側へ向かって堆積する落ち込み状遺構である。規模は不明であるが、SX301に切られ深さ0.2～0.3mの遺構である。微量の弥生土器が出土した。

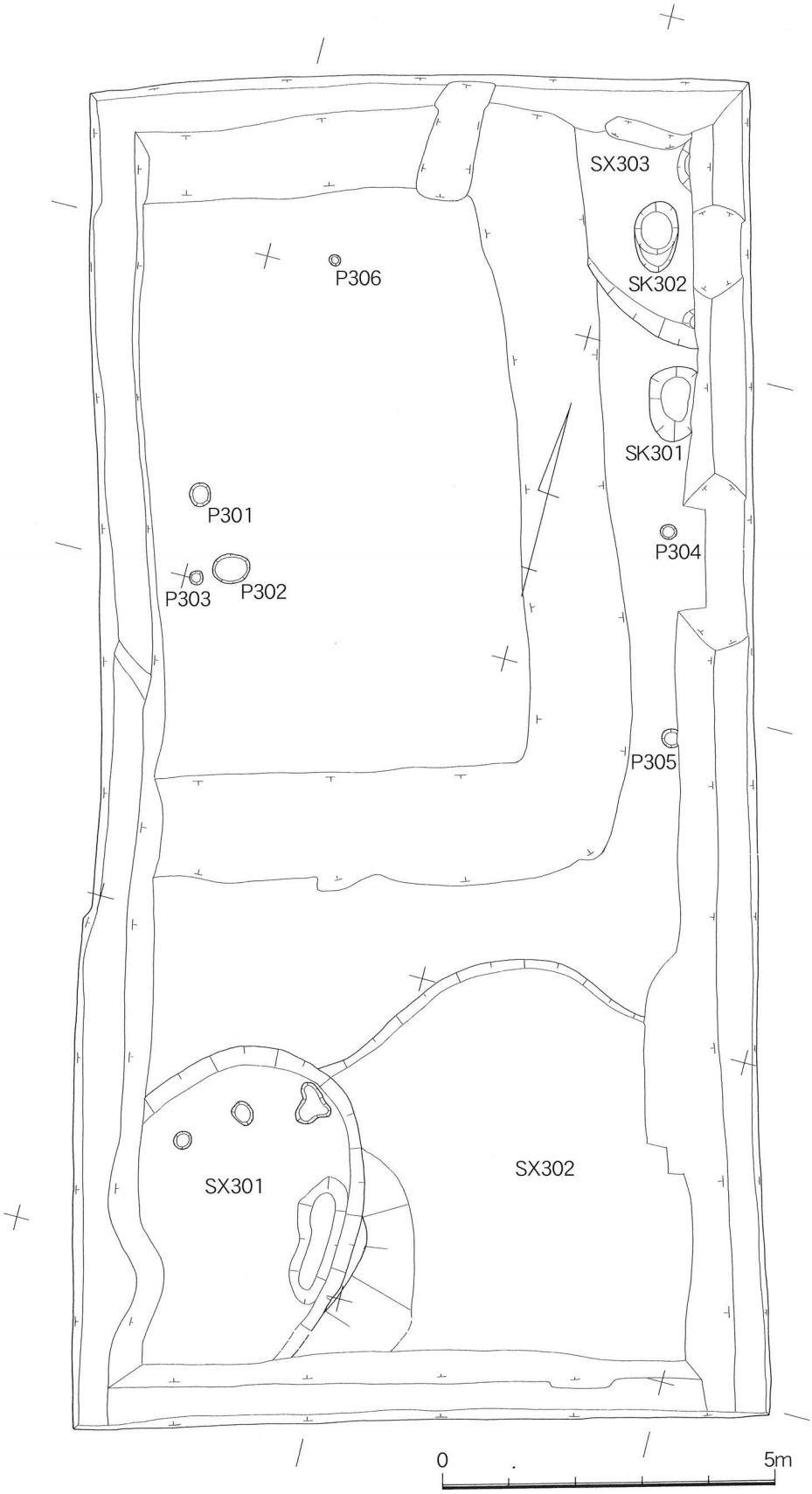
SX301、SX302内の堆積土は、ともに細かい砂層が繰り返し堆積していった様子がみられる。小規模の洪水の繰り返しにより、低い部分へ砂が堆積していった結果が、SX301、SX302として検出されたのであろうと考えられる。

3．ピット　ピットは調査区中央部西部に３基、中央部東端部で２基、北部で１基検出された。いずれも浅く、また建物などを構成するような組み合わせはなかった。P301、P302、P304で微量の弥生土器片が出土した。

調査区北東部で、SK301、SX303、SK302が検出された。

4．SK301　SK301は、短径0.7m、長径1.1m、深さ0.5mの楕円形の土坑で、弥生土器が出土した。遺物から弥生時代後期に属すると考えられる。

5．SX303　SX303は、深さ0.4mの落ち込み状遺構で、弥生土器、石鏃、石錐、サヌカイト剥片が出土した。北に向かって下がっていく遺構であるが、撹乱坑と調査区外へひろがるため、形状は不明である。

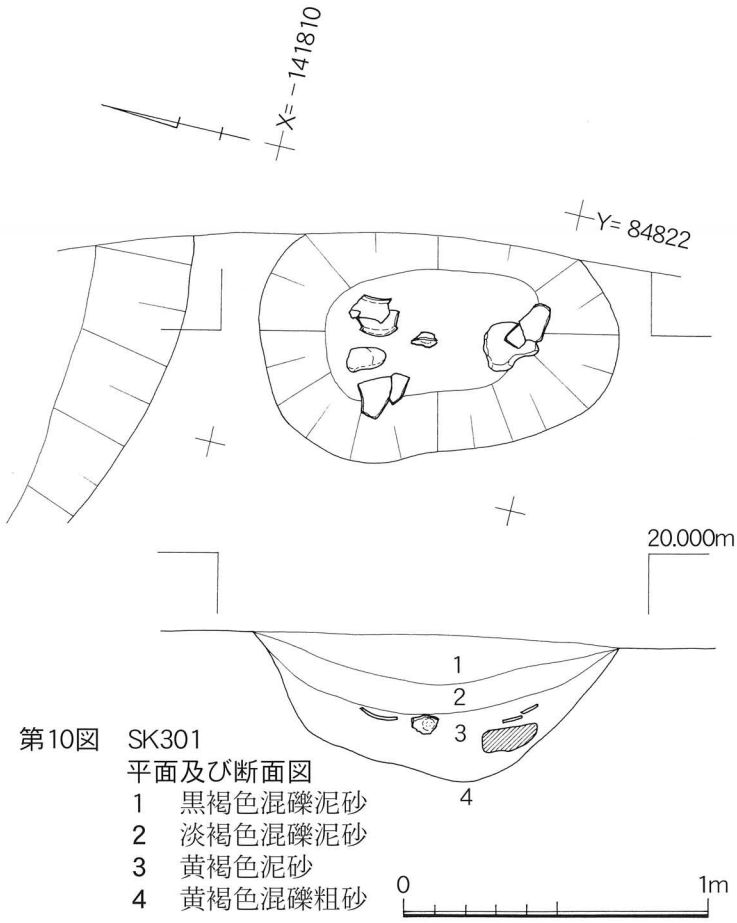



第９図　第３遺構面平面図

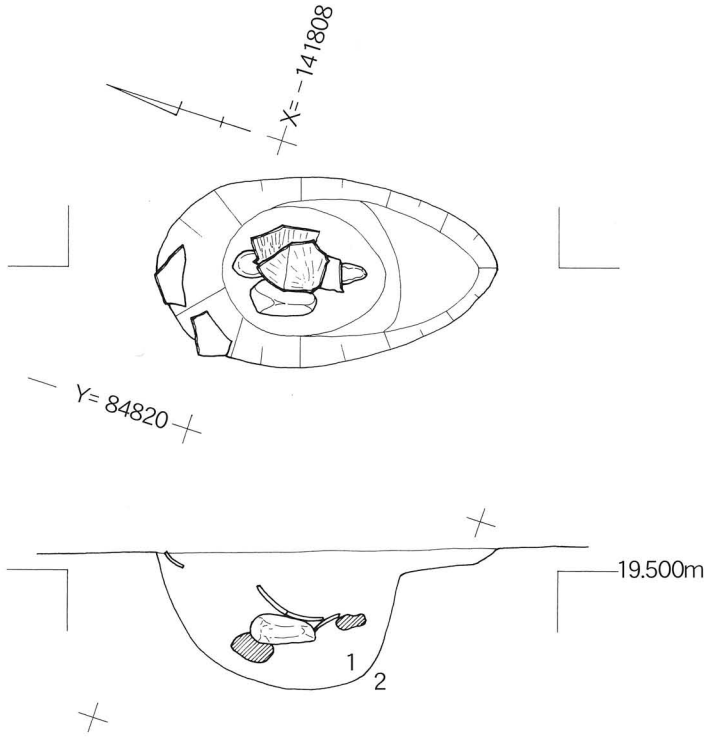
6．SK302

SK302は、SX303の底面から検出された短径0.6m、長径1.1m、深さ0.4mの楕円形の土坑である。弥生土器、サヌカイト剥片、磨石が出土した。遺物から弥生時代中期頃と考えられる。SX303及びSK302では、遺構掘削作業時にサヌカイト片が検出されたため、遺構内の土壌を土嚢袋にそれぞれ約100個と約20個採取し、現地で土壌水洗、選別作業を行った。水洗、選別作業によってもサヌカイト剥片が検出された。サヌカイト剥片は30～40㎜大から数㎜大のものまである。SK301、SX303およびこの周辺からもサヌカイト剥片が出土している。SX303では最大39×68㎜の剥片から最小5×6㎜までの剥片が54片出土している。

サヌカイト剥片の出土について、ただちに石器製作に結びつけるような積極的な状況ではない。遺構の性格については、今後の検討課題としたい。




第10図　SK301
平面及び断面図
1　黒褐色混礫泥砂
2　淡褐色混礫泥砂
3　黄褐色泥砂
4　黄褐色混礫粗砂




第11図　SK302平面及び断面図
1　黄褐色泥砂　　2　黄褐色混礫粗砂

8．第１遺構面の出土遺物

1．**遺物包含層１**　遺物包含層からは、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、鉄器などさまざまな遺物が出土している。しかしながら図化できた遺物はわずかであった。また現代盛土層からも、土師器、須恵器が出土し、また寛永通宝が２枚出土している。図化しなかったが、新しい時期に属するものとして東播系須恵器椀底部も出土している。

１は須恵器坏蓋である。口径は12cmほどで全体によく摩滅している。ツマミが平たく口縁部も退化しており、８世紀後半以降のものと考えられる。

２は須恵器坏蓋、３・４・７は須恵器坏身、６・８は壺口縁部と底部である。いずれも８世紀前後のものと思われる。

５は土師器甕で口縁部と底部を欠く。内面体部下半は指押さえ上半はケズリ調整である。外面はハケ調整である。頸部が薄くつくられる。古墳時代ころと考えられる。

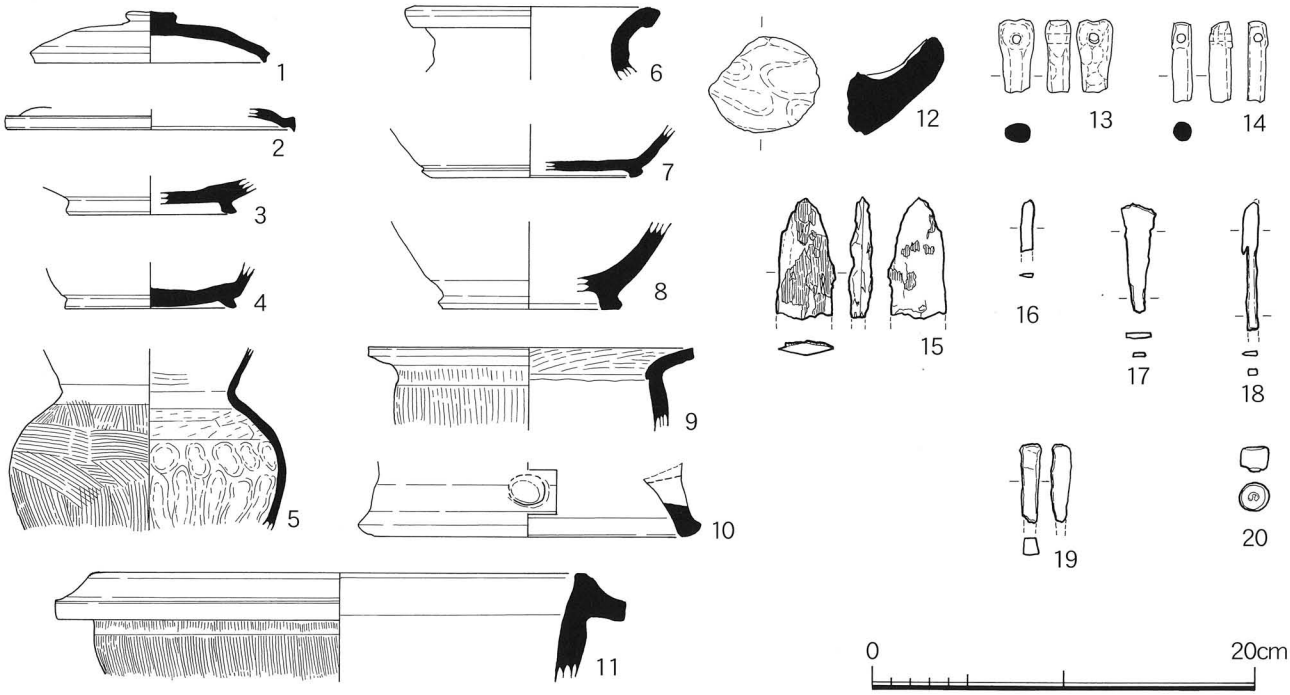
９は土師器小型甕である。内面は口縁部に粗いハケ調整が残るが全体にナデ調整を施す。外面は口縁部ナデ、体部は粗いハケ調整である。

10は器種不明の遺物である。土師器であろうか、径２cmほどの穿孔がある。上面は接合面があり、上部に器状のものが、接合されたと考えられる。よって脚台状の脚部として図化した。

11は直立する口縁、その直下に鍔状の突帯がつく土師器堝である。体部外面はハケ調整、口縁部から内面にかけてはナデ調整である。摂津Ｃ２型土釜と考えられ、10世紀後半ころの時期であろうか。

12は堝もしくは甑の把手である。13・14棒状土錘片である。図化できたものはわずかであるが、破片は多く出土している。

15は鉄剣切先であろう。木質が表裏に残る。16は片刃矢鏃であろう。17は鑿頭鏃、18は片刃矢鏃、19は鉄釘である。20は中実の不明鉄製品で、錘のようなものであろうか。




第12図　遺物包含層１（第１遺構面を覆う洪水砂）出土遺物実測図

## 2．鉄剣に付着した木質

15の鉄剣は刃部切先のみの破片である。表面を観察すると、所々に木質が銹化して残っている（挿図写真８）。木質は身の両面に存在し、繊維方向は長軸に平行している。

使用された樹種については少量をサンプリングし、樹脂包埋して薄片資料を作成し、透過光で顕鏡観察を行った。ただし試料に量的な制約があり、薄片試料を作成したのは柾目面の１点のみで、木口面と板目面については、遺物に付着した状態で顕鏡観察した。

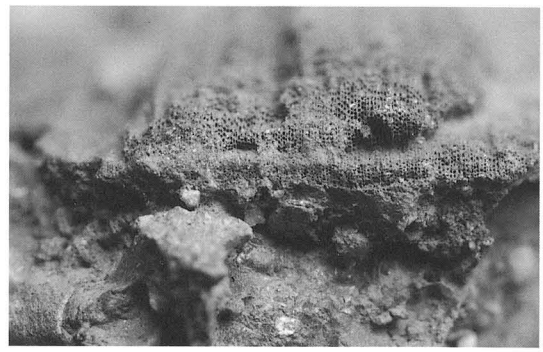
木口面（挿図写真９）は年輪界周辺の細胞がつぶれており定かでないが、早材部は均質である。樹脂道は観察されてなかった。

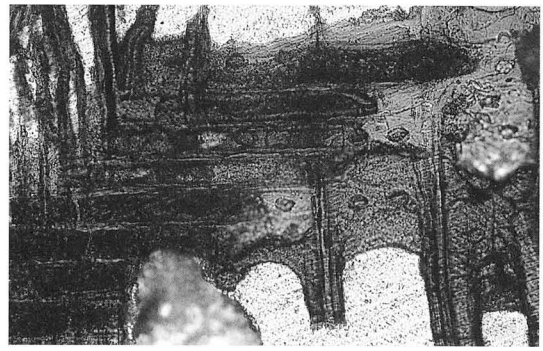
柾目面（挿図写真10）では写真中央に横断する放射組織が観察できる。分野壁孔は１分野に２個で、やや楕円形の壁孔縁と細いラグビーボール形の孔口が見え、ヒノキ型の分野壁孔であると判断できる。仮道管には有縁壁孔が単列に並ぶ。またらせん肥厚は見られない。

板目面は顕微鏡写真を掲載していないが、縦位に走る仮道管と、３～８細胞高の単列の放射組織が散在する状況が観察できた。また放射仮道管は観察できなかった。

以上の特徴を現生木材のミクロ組織と比較した結果、ヒノキであることが判明した。ヒノキは古来有用な木材として選択使用されており、遺跡からの出土例も多い。用例としては、柱や井戸枠など建築材、曲物、木簡、剣の把、檜扇、下駄、田下駄、琴、箸など様々である。これはヒノキのもつ物性が強靭で耐朽性、耐湿性に富んでいること、木目が均質で美しく、加工性がよいことなどが理由であると考えられる。

本例木質の器種であるが、付着状況などから推して、剣を納めた鞘ないしは箱と推測するのが妥当であろう。これが鞘であるならば、精密な加工が必要であろうことから、ヒノキが選択されたことは肯首できる。材は劣化のための損傷が大きく、表裏での木取りの差は判然とせず、接合部も残存しないことから、一木造りか２枚合わせかは定かでない。両面とも板目面が表出しているため、２枚合わせのものであれば板目板どうしを貼り合わせたものであり、刳り貫きの一木造りであるとしても、板目取りした材を用いたと考えられる。





挿図写真８（左）
木質付着状況
（1.2倍）
挿図写真９（右上）
ヒノキ木口面
（10倍）
挿図写真10（右下）
ヒノキ柾目面
（250倍）

3．SK101　　SK101、SX101などからの出土遺物は少量であった。須恵器坏蓋21と土師器埦22が出土した。21は端部がやや屈曲する。天井部は出土しなかった。9世紀ころかと考えられる。

4．SX101　　22は土師器坏で口縁部はナデ、底部はケズリ調整である。9世紀後半と考えられる。

5．SX102　　須恵器甕口縁部23のみが出土した。口頸部はやや長く、口縁端には、鈍い稜をもつ。口縁部内外面はナデ、頸部から体部内外面はタタキ調整である。6世紀後半ころの遺物であろう。

6．SD102　　24の復元口径25.2cm、25の復元口径31.6cmとなる土師器甕口縁部である。24は口縁部ナデ、体部外面はハケ調整、内面頸部はハケ調整があり、体部はナデ調整である。25は表面残存状況が悪いが、口縁部ナデ、体部内外面ともにハケ調整であろう。ほかに須恵器坏身26と棒状土錘27を図示した。遺物から8世紀後半から9世紀にかけてのものと考えられる。

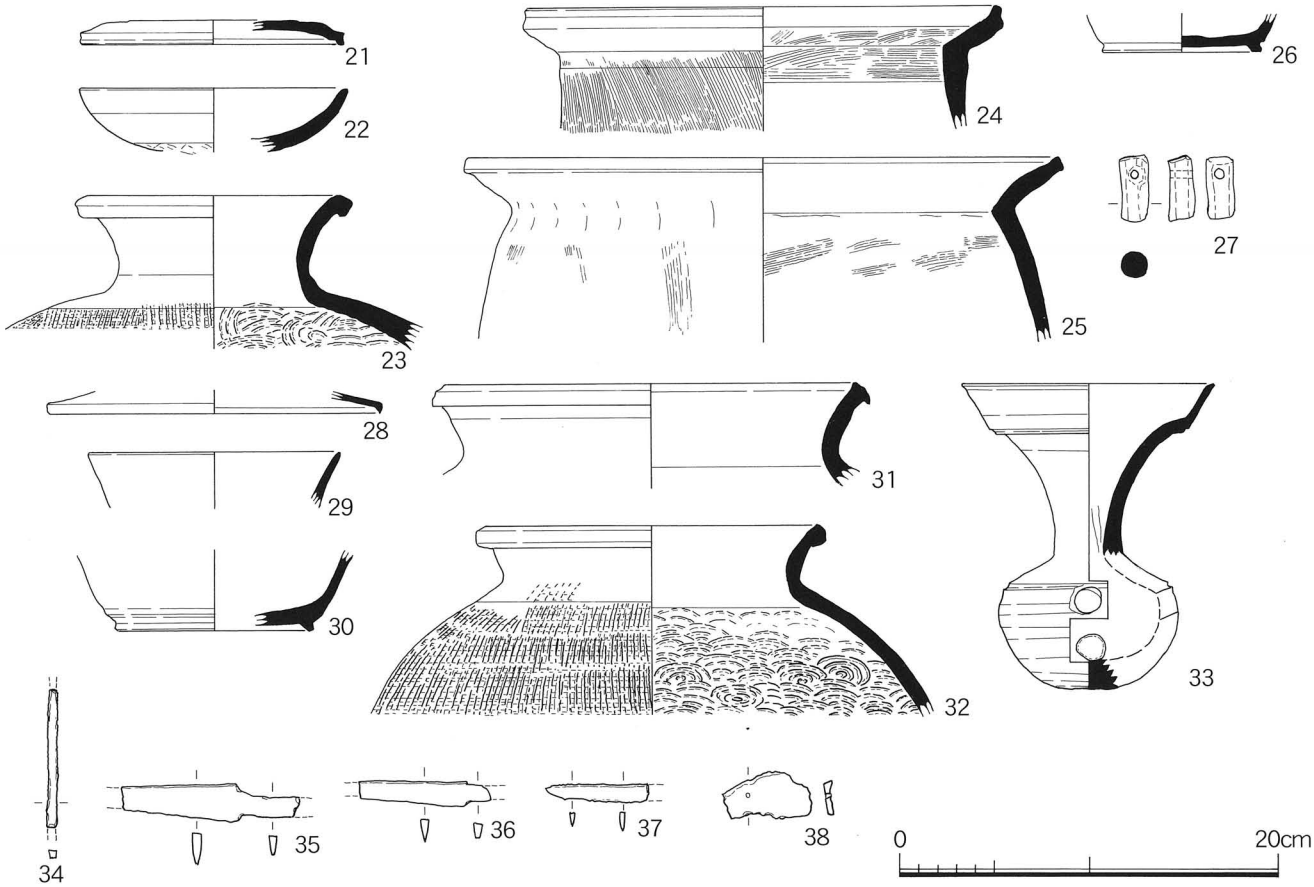
7．SX103　　SX103の出土遺物は、古墳時代から奈良時代の遺物が出土する。28ℓ入りコンテナボックスに2箱分の遺物が出土した。

28・29・30は須恵器坏蓋、坏身で、奈良時代のものである。31・32は須恵器甕口縁部で、古墳時代後期に属する時期のものであろう。

33は甕で、肩部に1条の沈線を施し、体部から底部までケズリ、口頸部はナデ調整である。内部には穿孔時の粘土片が底部に付着しそのまま残る。

34は、鉄釘もしくは鉄鏃で、長さ73.5mm、一辺 5.2mmの方柱状の鉄製品である。

35から37は、鉄製刀子である。35は、刃幅20mm、茎幅11mm、36は、刃幅13mm、茎幅8.7mm、37は、刃幅9.8mm、茎は欠損している。38は、板状鉄製品で、図示した孔は鋳造時の鬆と考えられる。




第13図　第1遺構面出土遺物実測図

## 8．家形埴輪

39から44は、家形埴輪片である。埴輪片は大小あわせて約20片出土している。図示した41のみSK104から出土している。その他はSX103から出土している。

SX103の堆積土は北西方向からの洪水によるものである。当調査の古墳南端部分を含めて南側がSX103となる。この洪水砂には、古墳時代から奈良時代にかけての遺物を含むことから奈良時代以降の洪水により堆積したと考えられる。これら埴輪片や鉄剣等は、当古墳を含め当調査地北側に存在するであろう古墳からもたらされたものと考えられる。

埴輪片は、他の土師器類と比べ黄色味を帯びる。胎土は、六甲山南麓に通有する1～5㎜大の長石、石英、チャート、クサリ礫を含むが、焼成によるものか主材の粘土が脆い。このため表面に合成樹脂塗布（アルタインG）、また一部の破片には合成樹脂含浸（パラロイドB72）を行なった後、接合復元作業を実施した（註）。

39の妻側には円形に復元されるスカシがある。スカシの周辺の調整はナデ調整である。表面の破風や大棟の部分は、14～20本／25～30㎜幅のやや粗いハケ調整を施す。ハケ目によって破風や棟覆の模様を表現はせず、その方向は自在である。棟には破風の接合痕がある。大棟は今述べたように乱方向のハケ調整で、この上にヘラ描きで棟覆の押縁（棟と平行）と笄（棟に直行）の表現が2条ずつ観察される。しかしながらそれぞれの切り合い関係はその部分の破片がなく不明である。軒先は直線的につくられている。43についてはヘラ削りであるが、39の調整はヘラ削り後ナデ調整であろうか。

40はスカシ孔と埴輪片の曲がり具合から妻壁隅部分と考えた。表面は39と同様のハケ調整で、裏面はナデ調整である。

41は破風片と考えられる。破風上辺は約2㎝で薄く屋根に接合する部分は約3㎝でやや厚い。41の胎土は特に黄色味を帯びている。接合面以外はハケ調整である。

42、43は屋根部分で、表面は39と同様のハケ調整で、裏面はナデ調整である。42の大棟部には3箇所の径3～5㎜、深さ3～4㎜の小孔がある。大棟に何らかの飾りを付けた痕跡であろうか。現状で類例は不明であり今後検討したい。43の大棟にあたるハケ調整面は平坦に仕上げられている。裏面はナデ調整である。壁部材がのる部分には幅2㎝ほどの粘土を貼り付けている。

44は、基部であろう。底辺が直線的につくられ、粗いナデ調整である。底辺部は約3㎝でやや厚い。また裾回突帯の痕跡がみられる。表裏共にナデ調整である。

実測図の下に復元図を図示した。図上復元で高さ46㎝、幅30㎝ほどとなった。住吉宮町遺跡第9次住吉東古墳例や西岡本遺跡第1次例に比しやや小さいようである。

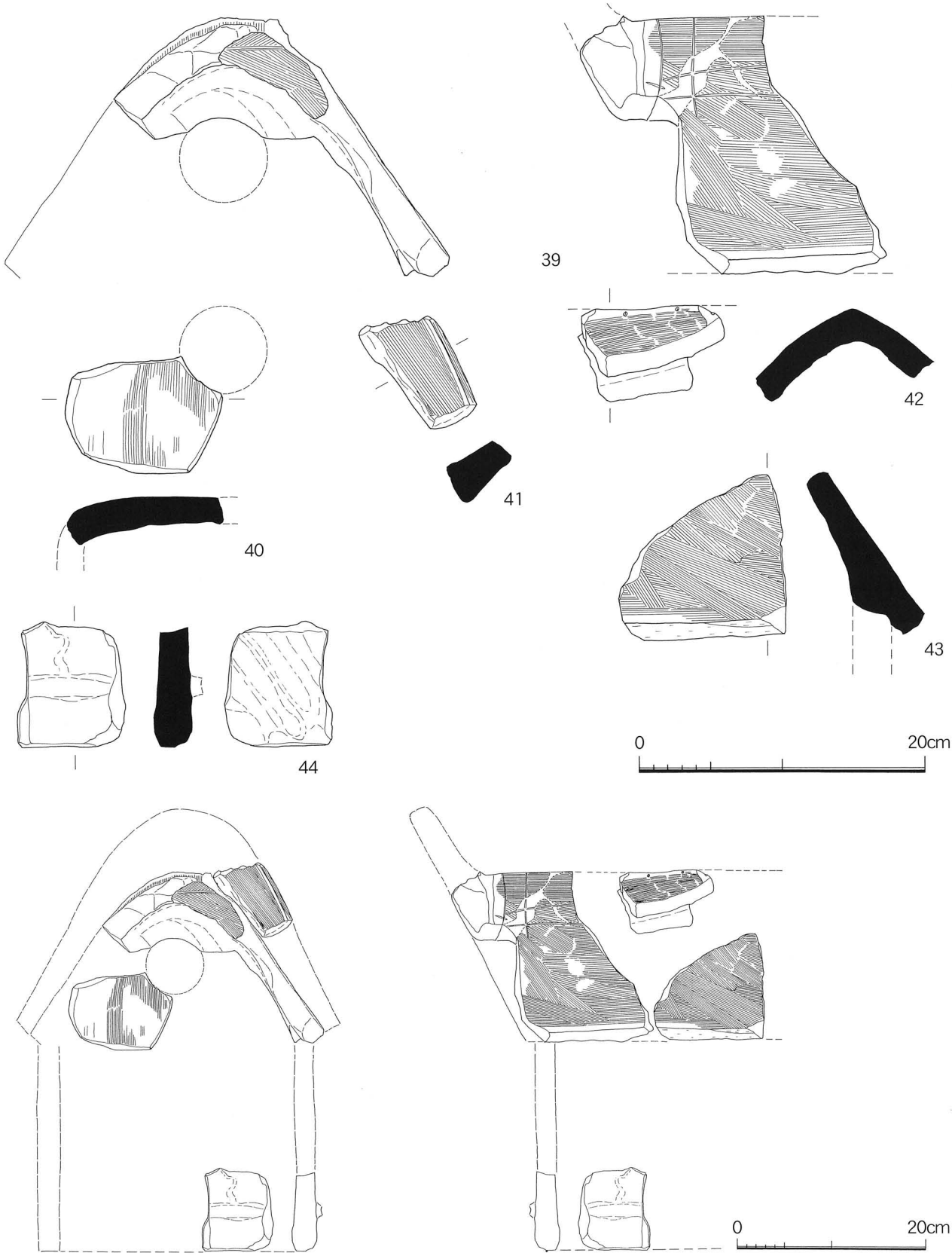
住吉宮町遺跡では、家形埴輪の出土例は、第9次以外には第17次があげられる。また形象埴輪をもつ古墳は住吉東古墳と第24次2号墳と限られているようである。

上記のことから墳形の相違、方墳であれば墳丘規模、埴輪や列石、葺石の有無そして古墳と箱式石棺との相違によって階層差を示すことがこれまでにも言われてきた。個々の古墳の分析をはじめ坊ヶ塚古墳の墳形が前方後円墳か帆立貝式古墳なのか、古墳群として捉えるべき課題は多く示されている。今後検討を加えたい。

註 遺物の保存処理については、文化財課中村が行なった。家形埴輪については、同課須藤　宏の助言を得て以下の文献等を参考に図化作業等を行なった。

浅岡俊夫編「神戸市東灘区西岡本遺跡」六甲山麓遺跡調査会2001　P128～P132

三輪嘉六・宮本長二郎「家形はにわ」日本の美術第348号1995




第14図　SX103出土家形埴輪実測図及び家形埴輪復元図

9．第２遺構面の出土遺物

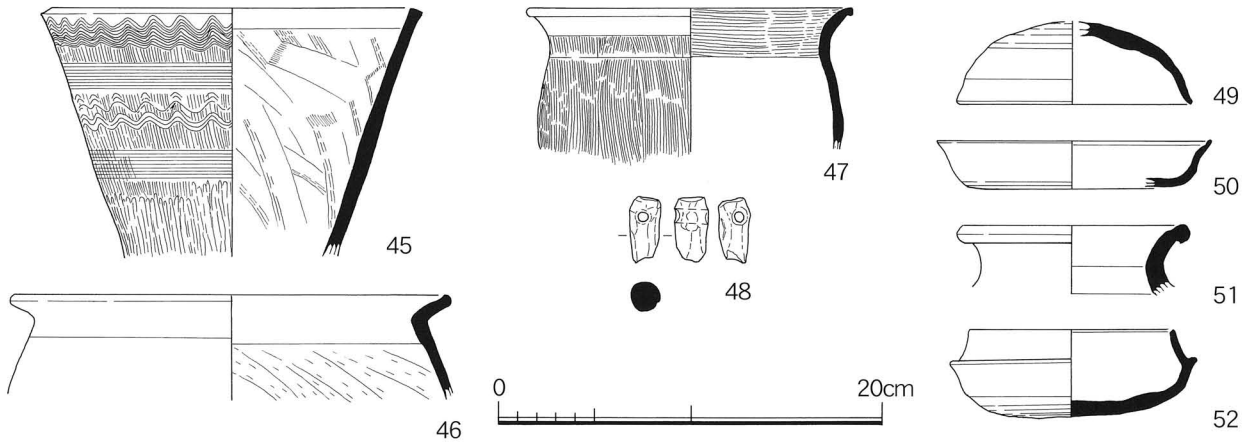
1．包含層２　45は直口壺で、内外面ともハケ調整である。２帯の直線文と櫛描波状文を施す。紀伊地方の影響を受けたものであろうか。

46は甕口縁部で内面はケズリ調整である。外面はナデ調整である。ほかに棒状土錘48が出土している。

47は墳丘上土坑からの出土遺物である。外面ハケ、内面はナデ調整で形状から古墳時代以降のものと考えられる。いずれにせよ古墳にともなうものではない。

2．SK201　墳丘を切る土坑から49須恵器坏蓋と50土師器坏が出土した。49は古墳時代終末期、50は底部にケズリ調整をほどこす。遺構の時期は８世紀ころと考えられる。

3．SD201、他　51は須恵器壺口縁部である。52は、北側周溝底部から出土した須恵器坏身である。出土状況から唯一当古墳に伴う遺物と考えられる。外面ケズリは底部３分の２ほどあり、口縁端部、受け部端部は稜をもたずまるくおさまる。以上よりTK47型式よりやや新しい時期であろうか。




第15図　遺物包含層２（古墳を覆う洪水砂）及び第２遺構面出土遺物実測図

10．第３遺構面の出土遺物

1．遺物包含層３　弥生時代の遺物包含層で、基本的に前期の土器は含まず、中期から後期にかけての土器が含まれているようである。

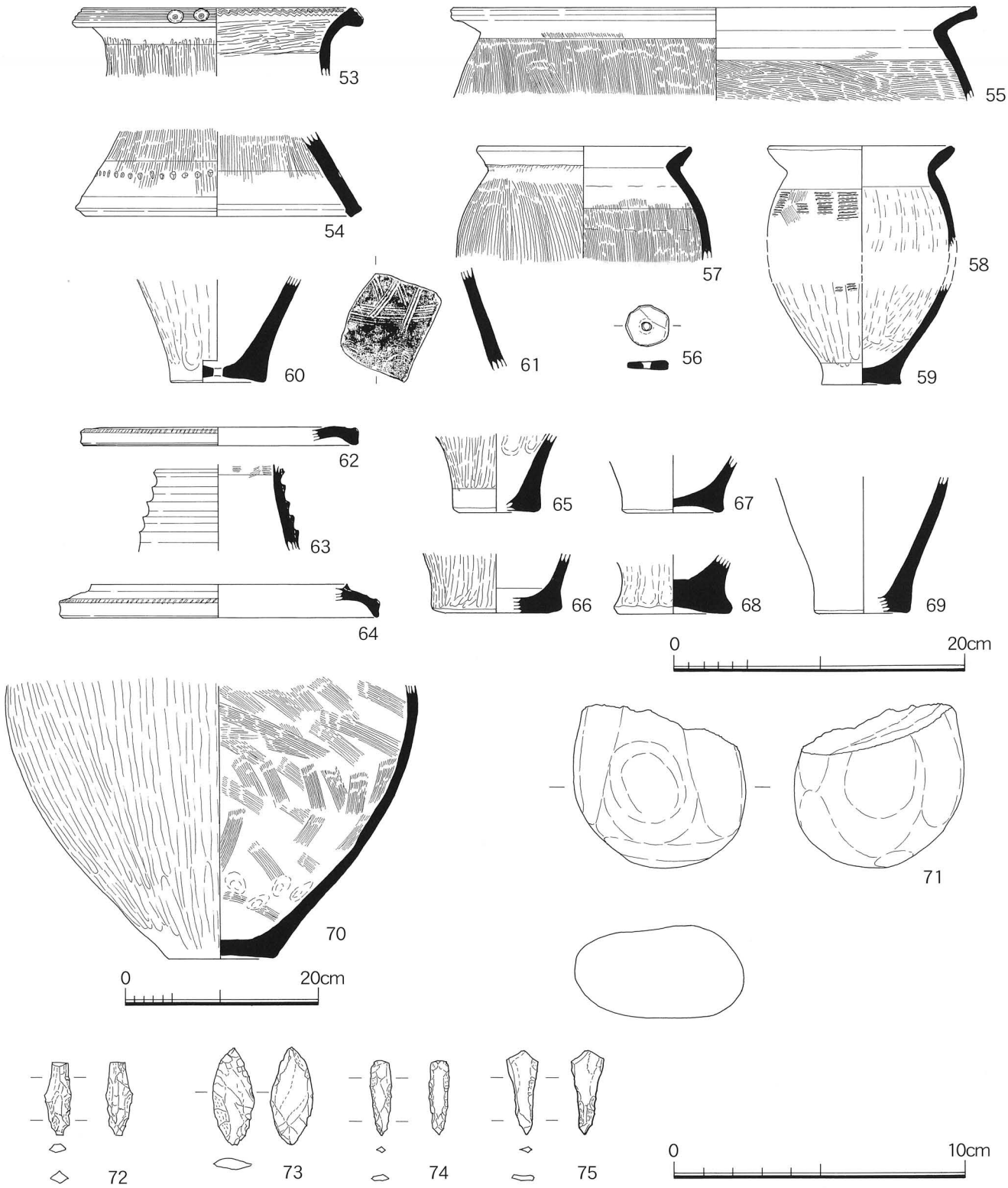
53は壺口縁部で３条の凹線に２個一対の円形浮文を貼り付け、上面に波状文を施す。出土した口縁部が断片であるため円形浮文の数は定かではない。茶褐色の胎土で多くの角閃石を含み生駒西麓産のものと考えられる。

54は脚台である。体部に刺突列点文を施す。60は甑底部である。外面には指おさえ痕が残るが、内外面ともにナデ調整である。

55は甕口縁部で、口頸部はナデ、内外面はハケ調整を施す。復元径36㎝の大型のものである。

56は土製紡錘車で径３㎝ほどの小型のものである。

2．SK301　57は甕口縁部である。口縁部はナデ調整、体部内外面はハケ調整を施す。58と59は調整および胎土から同一個体として復元した。口頸部体部外面はタタキ調整後ハケを施す、底部は幅広い縦方向のミガキ調整、底部はナデ調整である。内面は縦方向のケズリを施す。口縁部はやや厚くつくられている。遺物から弥生時代後期と考えられる。




第16図　包含層３（古墳形成層）及び第３遺構面出土遺物実測図

3．SX303　61は拓本で示す。斜格子文、直線文、波状文で加飾された壺体部である。文様構成から播磨地方の影響を受けた土器であろう。62は壺口縁で、口縁は屈曲し、口縁端部がわずかに垂下する。端部上面に刻みを施す。63は５条の断面三角形の突帯をもつ壺頸部である。ともに播磨地方の影響を受けた土器であろう。

64は高坏坏部口縁部片である。やや垂下する口縁部上端に刻みを施す。65から69は壺もしくは甕底部である。

72から75は、サヌカイト石錐もしくは石鏃である。73は凸基無茎式石鏃で、1.64ｇである。74と75は石錐である。それぞれ0.63ｇ、0.69ｇである。

ほかに遺構内から土壌水洗作業により検出されたものとあわせて、サヌカイト剥片が合計54点出土した。剥片は最大39×68㎜から最小５×５㎜まである。遺物より弥生時代中期中頃と考えられる。

4．SK302　70は壺底部である。外面は縦方向のミガキ調整、内面はハケ調整後ナデを施す。口縁部は出土していない。復元最大径は42.5㎝である。

71は磨石である。重さ1296.20ｇ、比重2.928で閃緑岩もしくは角閃石閃緑岩と考えられる。図上の底面以外、上面、側面などは使用されよく磨耗している。

この壺底部から時期を判断することは難しいが、SK302を覆うSX303から概ね同様の弥生時代中期中頃の時期が考えられる。

ほかに遺構内の土壌水洗作業により、サヌカイト剥片が２点出土した。

5．SX301　微量の弥生土器片と72の石錐が出土している。72は1.01ｇで根元、先とも欠損している。

11．小結

出土した弥生土器について、包含層２の直口壺45は紀伊地方の影響を受けたものであろうか。包含層３の生駒西麓産の壺口縁部53や、SX303の61～63播磨地方の影響を受けたものなど他地域からの搬入品や他地域の影響を受けたものがある。陸上のみならず海を介してさまざまな地域の影響を受けたものが出土している。また弥生土器に限らず分量はきわめて少ないが、土師器を含め他地域からの搬入品として識別できる遺物がある。

当調査では弥生時代、古墳時代、奈良時代に住吉宮町遺跡が、陸上交通、海上交通を通じて他地域との交流があったことが考えられる。

文物が単に当遺跡を通過するのではなく、受け入れまた消化したものを異なる形で発信していったのであろうことが理解される。

## 第３章　土壌分析

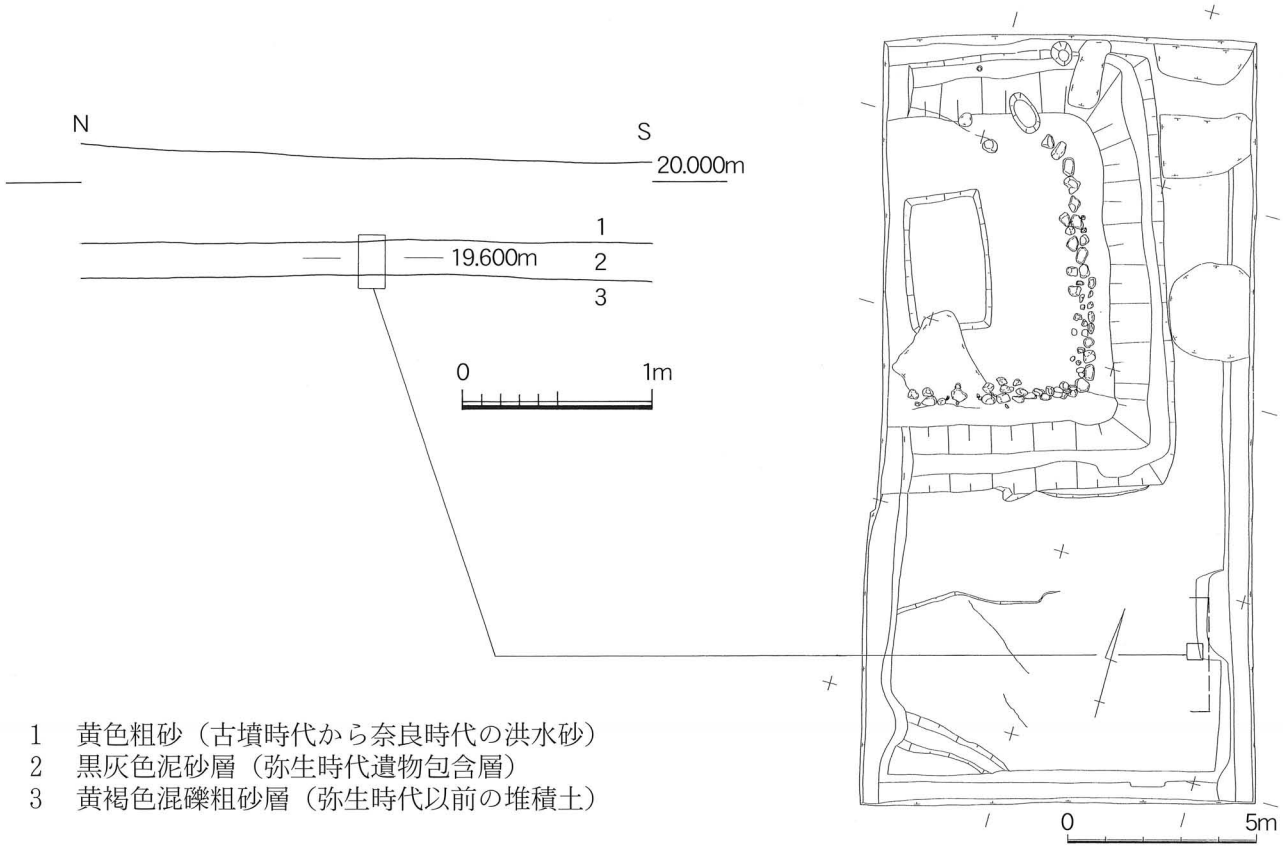
### １．サンプル採取

今回の調査で、３面の遺構面が検出された。第２章２基本層序でも触れたが、第１遺構面は奈良時代前後、第２遺構面は古墳時代中期頃、第３遺構面は弥生時代である。

調査区北側の撹乱坑断面で、弥生時代の遺構面を覆う黒灰色泥砂層（弥生時代遺物包含層）上面に耕起痕のように観察される箇所があった。黄色粗砂（古墳時代から奈良時代の洪水砂）の洪水による堆積状況によって、下層の黒灰色泥砂が舞い上がった結果とも考えられる。その後調査が進む中で、前記撹乱坑断面以外の箇所でも断面に同様の耕起痕が観察された。

このため当調査地で、古墳時代以前の耕作が行われた可能性を明らかにするため、土壌分析を実施することとした。

**参考文献** 口野編「郡家遺跡御影中町地区第３次調査概報」神戸市教育委員会1990




1　黄色粗砂（古墳時代から奈良時代の洪水砂）
2　黒灰色泥砂層（弥生時代遺物包含層）
3　黄褐色混礫粗砂層（弥生時代以前の堆積土）

第17図　土壌分析サンプル採取地位置図及び断面図

挿図写真11　撹乱坑にみえる耕起痕

挿図写真12　サンプル採取作業状況

## 2．プラント・オパール分析

鈴木　茂・米田恭子（パレオ・ラボ）

**1．はじめに**　住吉宮町遺跡はＪＲ住吉駅の南西に所在しており、第46次調査では古墳時代後期の古墳（方墳）が１基発見されている。また、形象埴輪も数点出土している。この発掘調査において、弥生時代遺物包含層上面に耕起痕とみられる箇所が観察された。こうしたことから当調査地で、古墳時代以前に耕作が行われていた可能性について検討する目的で土壌試料が採取された。以下にこの土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、弥生時代における耕作や遺跡周辺のイネ科植生について検討した。

**2．試料と分析方法**　分析用試料は、２層の弥生時代遺物包含層（黒灰色の粘土質砂：試料１）と３層の弥生時代遺構面（黄褐色の小礫が多く混じる粘土質砂：試料２）より採取された２試料である。なお、最上部１層は古墳時代の黄色洪水砂である。この２試料について以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約0.04㎜）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーよる試料の分散後、沈降法により0.01㎜以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

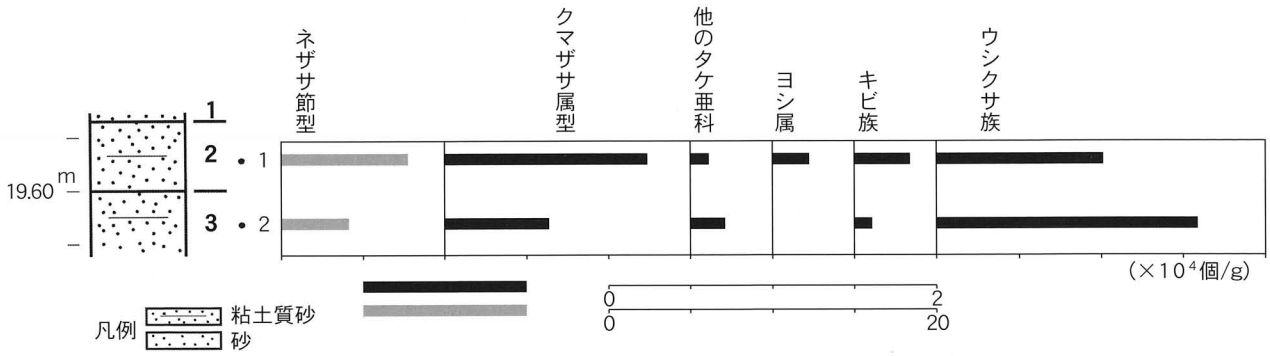
**3．分析結果**　同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当りの各プラント・オパール個数を求め（表１）、それらの分布を図１に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料１ｇ当りの検出個数である。

検鏡の結果、イネのプラント・オパールは検出されなかった。最も多く検出されたのはネザサ節型で、試料１が約78,000個、試料２が約41,000個であった。次いでウシクサ族が多く、両試料とも10,000個を越えている。クマザサ属型も比較的多く、試料１では約12,000個を示している。その他、キビ族、ヨシ属などが観察されている。

表２　試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数

| 試料番号 | ネサザ節型（個／ｇ） | クマザサ属型（個／ｇ） | 他のタケ亜科（個／ｇ） | ヨシ属（個／ｇ） | キビ族（個／ｇ） | ウシクサ族（個／ｇ） | 不明（個／ｇ） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 77,500 | 12,400 | 1,100 | 2,200 | 3,400 | 10,100 | 10,100 |
| 2 | 41,300 | 6,300 | 2,100 | 0 | 1,100 | 15,900 | 3,200 |

**4．遺跡周辺のイネ科植物**　試料１、試料２ともにイネのプラント・オパールは認められなかったことから、少なくとも試料採取地点近辺では弥生時代において稲作は行われていなかったと推測される。ネザサ節型が多く検出されており、この時期の遺跡周辺では開けたところにネザサ節型のササ類（ケネザサ，ゴキダケなど）が多く生育していたとみられる。また、同じ様な所にウシクサ族（ススキ，チガヤなど）も分布していたと考えられ、ケネザサースススキ群集といったような草地が形成されていたと推測される。キビ族についてはその形態からアワ，ヒエ，キビといった栽培種によるものか、エノコログサ，スズメノヒエ，イヌビエなどの雑草類によるものか現時点では分類できず不明であるが、現生標本の観察からここでは雑草類に由来するキビ族と推測され、ケネザサースススキ群集とともに生育していたとみられる。なお、ケネザサは関西の山麓や丘陵地によくみられる最も普通のササ類である（北村・村田，1984）。



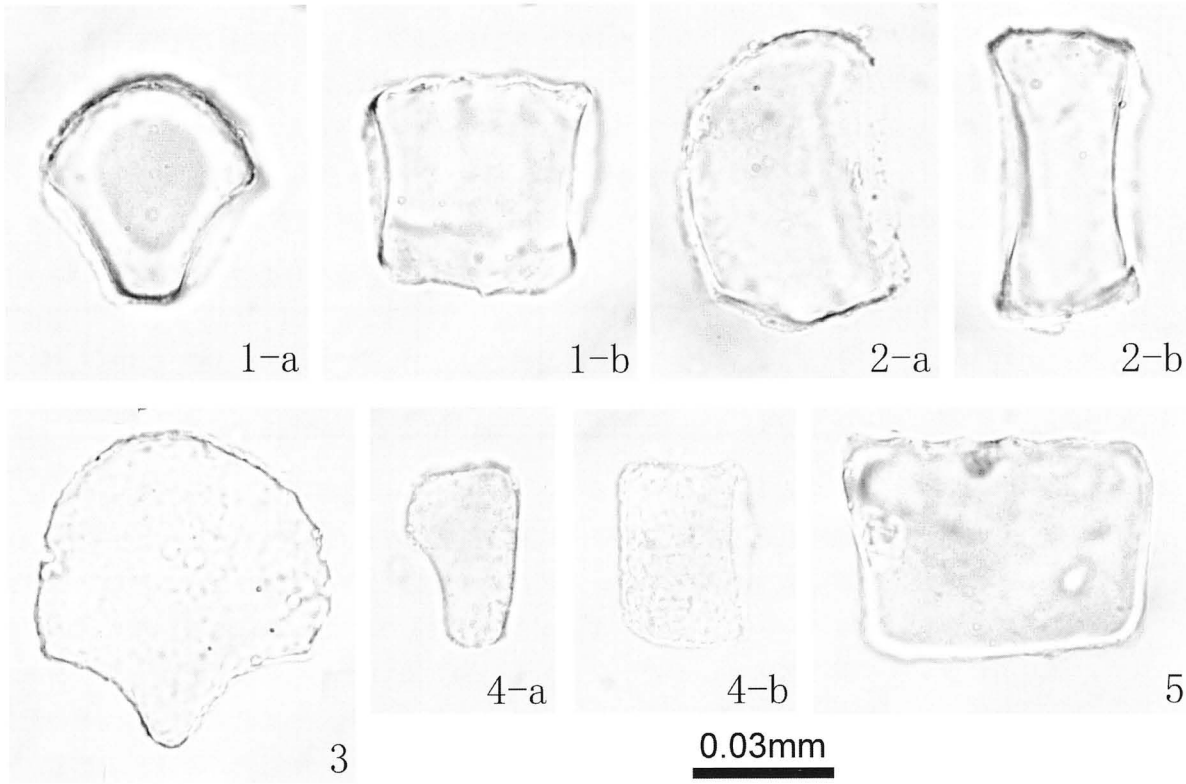

第18図　住吉宮町遺跡のプラント・オパール分布図

一方、クマザサ属型のササ類（スズタケ，ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していたであろう森林の下草的存在で生育していたとみられる。

ヨシやツルヨシなどのヨシ属が試料１で検出されていることから、この時期、遺跡周辺においてヨシ属が生育する湿地や水域の存在が推測されよう。

引用文献

北村四郎・村田　源（1984）原色日本植物図鑑 木本編〔Ⅱ〕. 545ｐ，保育社.




挿図写真13　住吉宮町遺跡のプラント・オパール
１：ネサザ節型（ａ：断面、ｂ：側面）　試料１　２：クマザサ属型（ａ：断面、ｂ：側面）　試料１
３：ヨシ属（断面）　試料１　４：ウシクサ族（ａ：断面、ｂ：側面）　試料１　５：キビ族（側面）　試料２

## 3．花粉分析

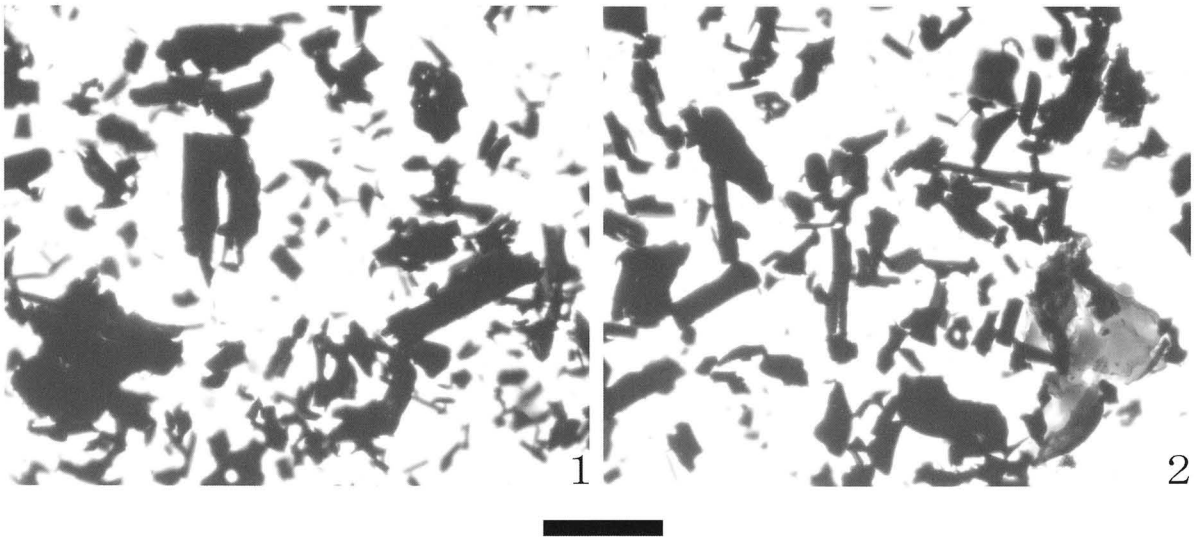
鈴木　茂（パレオ・ラボ）

**1．はじめに**　住吉宮町遺跡において行われた第64次調査の際、弥生時代の土層より土壌試料が採取された。以下に、この土壌試料について花粉分析を行い、当時の遺跡周辺の古植生について検討を試みた。

**2．試料と分析方法**　試料は、２層の黒灰色粘土質砂（弥生時代遺物包含層：試料１）と３層の小礫が多く混じる黄褐色粘土質砂（弥生時代遺構面：試料２）の２試料である。花粉分析はこの２試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約７ｇ）を遠沈管にとり、10％の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

**3．結果および考察**　検鏡の結果、花粉化石は１個体も観察されず、試料１で三条型のシダ植物胞子が１個体のみ検出された。こうしたことから、弥生時代の古植生については言及できない結果となった。元来、花粉は丈夫な外膜を持ち、水域に堆積した花粉は良好な状態で保存される。しかしながら陸域に落下した花粉は紫外線や土壌バクテリアなどにより容易に分解・消失してしまう。作製したプレパラートには植物片が多く認められているものの花粉化石は観察されていないことから、花粉は紫外線や土壌バクテリアなどにより分解・消失している可能性が高いと推察される。また、堆積物は砂が卓越していることから、花粉の一部は流失している可能性も推察されよう。




挿図写真14　住吉宮町遺跡の花粉分析プレパラート（scale ber：０．１㎜）
１：プレパラートの状況　試料１　２：プレパラートの状況　試料２

## 第4章　まとめ

今回の調査では、3面の遺構面が検出された。第1遺構面は奈良時代前後、第2遺構面は古墳時代中期頃、第3遺構面は弥生時代である。

第1遺構面SX103から出土した埴輪片や鉄剣片は、今回検出された古墳や周辺の古墳との関連を検討すべき点であろう。奈良時代から中世にかけての遺構も存在したと思われるが、基本層序でも述べたが安定した状況ではなかった。

第2遺構面での古墳の発見は、周辺に同様の古墳を構成する区域が東へひろがることを示唆し、さらに洪水砂の流れから当調査地北側にも古墳の存在が考えられる。

また当古墳の主軸は、第1・2次調査と同様の特徴がみられ（主軸N12W°前後）、第4次調査の箱式石棺群が介在するが、現状では同群と考えられる。また洪水砂で一瞬のうちに埋没したことや須恵器から同様の古墳時代中期以降から後半頃の時期が考えられる（第19図）。

第3遺構面のSX303、SK302からのサヌカイト剥片の出土は、周辺での石器製作の可能性をうかがわせる。既往の調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構、遺物は確認されているが、中期に属する遺構はほとんどない。今回の調査での弥生時代中期の遺構、遺物の検出は、住吉宮町遺跡の始まる時期がさかのぼる1例を示すこととなる。

出土した弥生土器について包含層2の45直口壺は紀伊地方、包含層3の53は生駒西麓産、SX303の61～63は播磨地方など他地域からの搬入品や他地域の影響を受けたものがある（寺沢・森岡編1989・90）。陸上のみならず海を介してさまざまな地域の影響を受けていることが考えられる。

弥生土器に限らず土師器を含め他地域からの搬入品として識別できる分量は多くはないが、当遺跡が他地域との交流の上に成り立っていたことを示している（菅原1983）。

当調査で発見された古墳は、住吉宮町遺跡で発見された古墳として76基目の古墳となる。表1で示すように帆立貝式古墳（住吉東古墳）や前方後円墳（坊ヶ塚古墳）、また第18次調査横穴式石室などを含めた数である。また箱式石棺の数（約20基）は除外したが、これらを含めると100基近い数となる。これらの古墳等は現状では国道2号線以北に発見されている。さらにＪＲ軌道の北側の坊ヶ塚古墳や第24次、第35次調査地は扇状地の高まりに築造されている。

第20図に示すようにＪＲ軌道と国道2号線との傾斜と国道2号線以南の傾斜とを比較すると前者が後者に比べ緩傾斜であることがわかる。これは現代の地形のみならず各時期を通じて同様のことが言えそうである。挿図写真15は、第20図右上矢印方向から国道2号線及び調査地を見たもので、共同住宅の石垣や柵の高低差から勾配が観察できる。

国道2号線以北には、以南に比べ緩傾斜地形が存在することが読み取ることができ、より安定した地形に古墳が築造されている。古墳群が形成される時期の生産域は、第45次調査地から郡家遺跡御影中町地区や第33次調査など国道2号線以南にひろがっていたと考えられる（註1）。

単純に南向きの日当たり良好な緩傾斜地で、水利にも往来にも利便性がある。このような区域は生産域としての条件が整っておりまた居住域としても適している。効率的且つ有効な区域をなぜ墓域として選択したのであろうか。

ただし当遺跡での土壌分析（第3章参照）では、弥生時代における稲作は行われていなかったという結果であった。可耕地としての可能性は低いが、堆積土壌内に砂が卓越

第19図　調査地周辺古墳群平面図

していた条件下での結果とすれば、単純に荒蕪地とすることはできないであろう。

次に比較検討する遺跡として、200基以上発見された大阪市長原遺跡の長原古墳群があげられる（註2）。長原古墳群は、時期や古墳群のあり方に共通する部分も多い。

弥生時代から古墳時代にかけての集落構成の分析で、杉本氏は長原遺跡の集落構造を提示している（杉本2003）。南北方向に伸びる丘陵上に古墳群が位置し、丘陵裾部の低湿地に生産域が存在し、墓域と生産域の中間域に居住域が存在する。さらに牧の存在が指摘され、生産物や牧の管理を行なう集団が出現してきたというものである（註3）。

また松野遺跡では、南北方向に伸びる沖積地の高まりに柵と溝で囲まれた居住域とは隔絶した空間と南接して居住域がひろがる遺構群が検出されている。古墳とは異なるがモニュメントが存在したことを示している。松野遺跡でも高燥の区域が、居住域ましてや生産域には充てられることはない（口野編2001）。

住吉宮町遺跡、長原遺跡、松野遺跡では、古墳や柵と溝で囲まれた空間を築造した人々にとって生活のなかで最も良好な土地条件の空間を墓域等に充てている。それほどこの墓域としての空間は、集落を営む中で最重要な位置を占めるものであったことを示している。

さて住吉宮町古墳群の盟主墳に充てられるべき古墳はどれであろうか。盟主墳は、群の中に紛れ込む存在ではなく、群の外に存在するのであろう。これらの地域の盟主墳は処女塚古墳、東求女塚古墳と考えるのが妥当であろう。処女塚古墳、東求女塚古墳を築造した後、住吉宮町の地を占有して古墳群を形成していった。水陸の東西交通の要衝をおさえる機能をもった集団が、これら集落と古墳を築造していったのであろう（註4）。

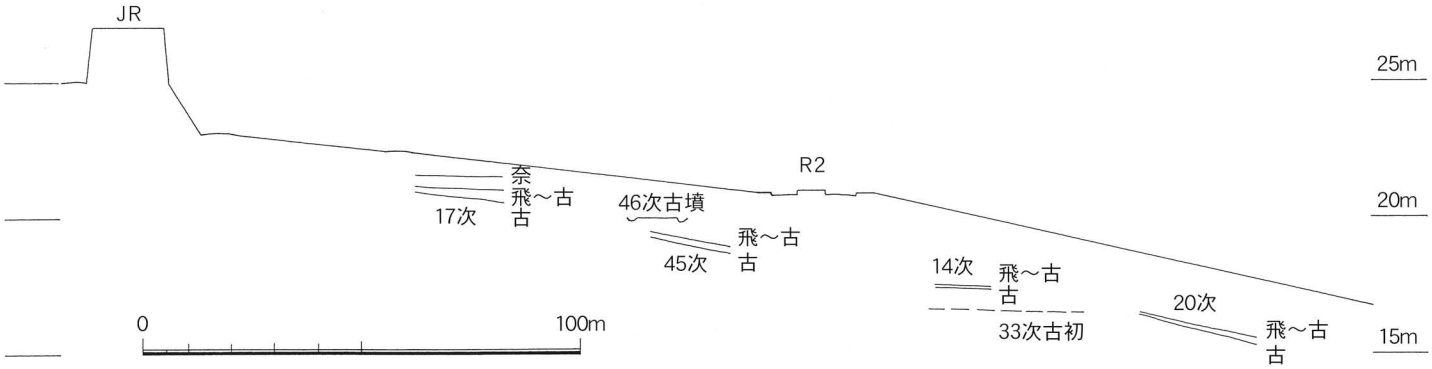
このあとに古墳群の洪水による埋没によって集落の移動が想定される。集落にとって何者にも替え難い重要な古墳の埋没は、集落そのものにも大きな被害をもたらしことは言うまでもなく集落の存廃にかかわる災害であった。

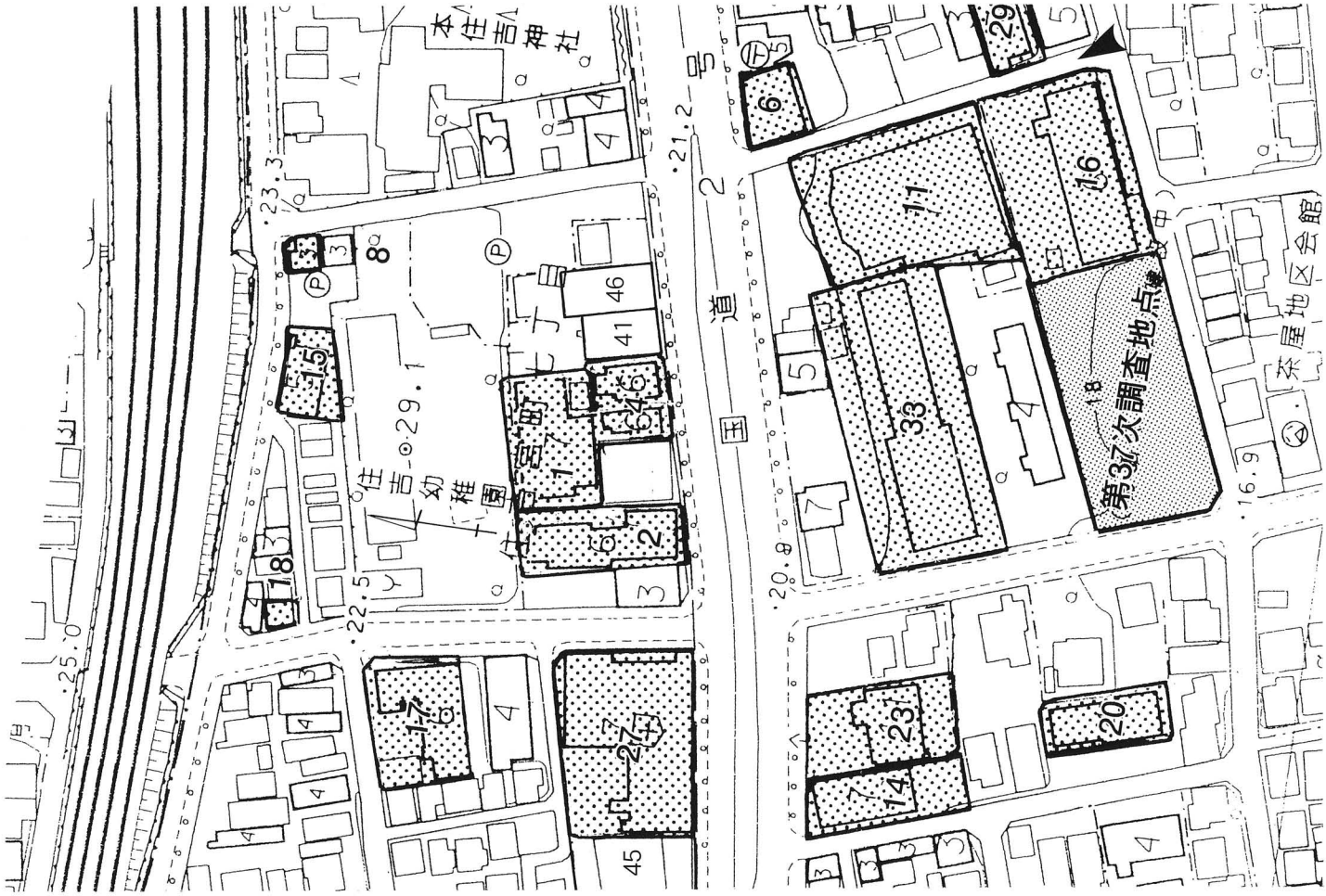
第33次調査では、住吉宮町遺跡及び郡家遺跡の弥生時代から中世に至る遺跡分布の様相を分析している。このなかで住吉宮町古墳群の造墓活動は終息し、六甲山地南麓に墓域は移行する。石室を構築する石材を求めての移動とされる（服部2002）。

この分析は大要として評価されるが、たとえば移行先のひとつである西岡本遺跡（野寄群集墳）では、既にON46，TK208の時期より古墳の築造が開始されている（浅岡編2001）。おそらく住吉宮町遺跡や郡家遺跡とは異なる集団の存在が考えられる。集落はそれぞれの地域や時期の特性を反映した機能をもって存在したであろう。

住吉宮町遺跡でも効率的且つ有効な区域を時期ごとに利用し、集落の盛衰を繰り返した。この地での造墓活動は終焉を迎えるが、遺跡は継続して営まれたようである。

今後検討すべき課題も数多くあるが、今回の調査では古墳の発見をはじめ住吉宮町遺跡を考察する上において多くの成果があった。




第20図　調査地周辺時期別遺構面断面図
奈：奈良時代　飛～古：飛鳥時代～古墳時代　古：古墳時代　古初：古墳時代初期

註１　第18図で第46次調査古墳（標高20m）が第45次調査水田状遺構面（標高19m）より高い位置にあるのは、東から西へ地形が下がっていることを示す。ほぼ同時期の墓域と生産域のしめる高低差である。さらに住吉宮町古墳群の西南端は第45次調査地周辺と現状では推定している。そして第45次調地査周辺から西側つまり郡家遺跡南部に生産域がひろがると考えている。また居住域は郡家遺跡北部や住吉宮町遺跡にあったと考えられる。

註２　長原古墳群の構成と時期　200基以上・前期末直径55m円墳（塚ノ本古墳）、直径46m小造出し（一ケ塚古墳）、一辺20m（長原40号墳）一辺15m（高廻り１号墳）、直径18m円墳（高廻り２号墳）・中期中葉一辺３～13m小方墳・後期後半横穴石室前方後円墳推定墳丘長24.4m（七ノ坪古墳）、前方後円墳推定墳丘長24.1m（南口古墳）（岸本1989）（大阪市1997）

註３　第32次調査（１号墳）では、馬の殉葬があり、馬の所有が報告されている。また住吉東古墳や第24次調査（２号墳）では、馬形埴輪が出土している。

註４　この古墳群を形成する社会構造と、前時代の巨大古墳を築く社会構造とは本質的に異なる差異があったのであろう。この差異の解明が、住吉宮町古墳群の有様を解明する鍵となるのであろう。

**参考文献**

浅岡俊夫編「神戸市東灘区西岡本遺跡」P189～P197六甲山麓遺跡調査会2001

「228長原遺跡の長原古墳群」「大阪市の文化財」大阪市教育委員会1997

岸本道昭「長原古墳群の歴史的意義」「大阪文化財論集－財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集－」財団法人大阪文化財センター1989

口野編「郡家遺跡御影中町地区第３次調査概報」神戸市教育委員会1990

口野編「松野遺跡発掘調査報告書第３～７次調査」P221～P224神戸市教育委員会2001

菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」文化財論叢奈良国立文化財研究所1983

杉本厚典「八尾南・長原・城山遺跡における集落構成の変化―弥生時代から古墳時代にかけての地域社会の一様相―」大阪歴史博物館研究紀要第２号2003

田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ1966

田辺昭三「須恵器大成」角川書店1981

寺沢薫・森岡秀人編「弥生土器の様式と編年」近畿編Ⅰ1989・近畿編Ⅱ1990

西川卓史「西摂平野の古墳と遺跡群の動態」「八十塚古墳群の研究」関西大学考古学研究室編2002

服部　寛・寒川　旭「住吉宮町遺跡第33次調査」P56～P63兵庫県教育委員会2002

森岡秀人「摂津八十塚古墳群と兎原郡葦屋郷・賀美郷周辺の古代史」「八十塚古墳群の研究」関西大学考古学研究室編2002

挿図写真15　南から調査地を望む

# 写　真　図　版

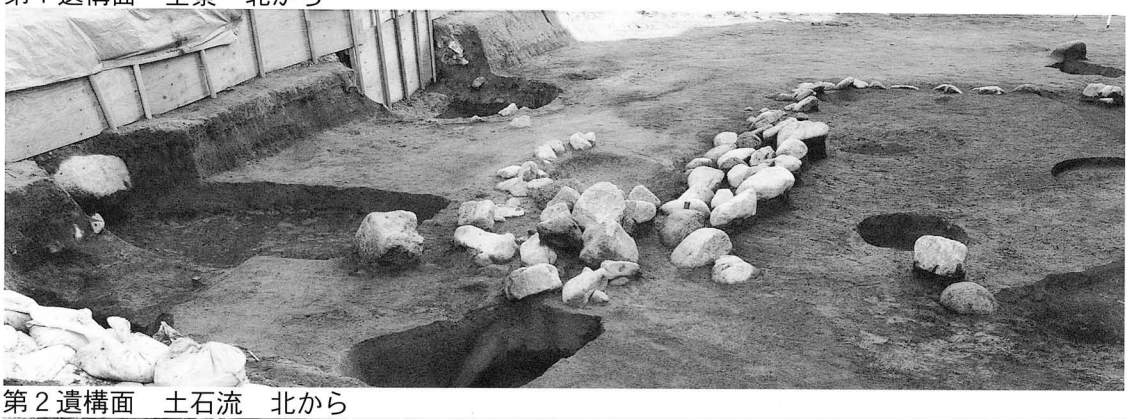
古墳検出状況　南から

古墳検出状況　北から

カラー図版２

SX103出土家形埴輪

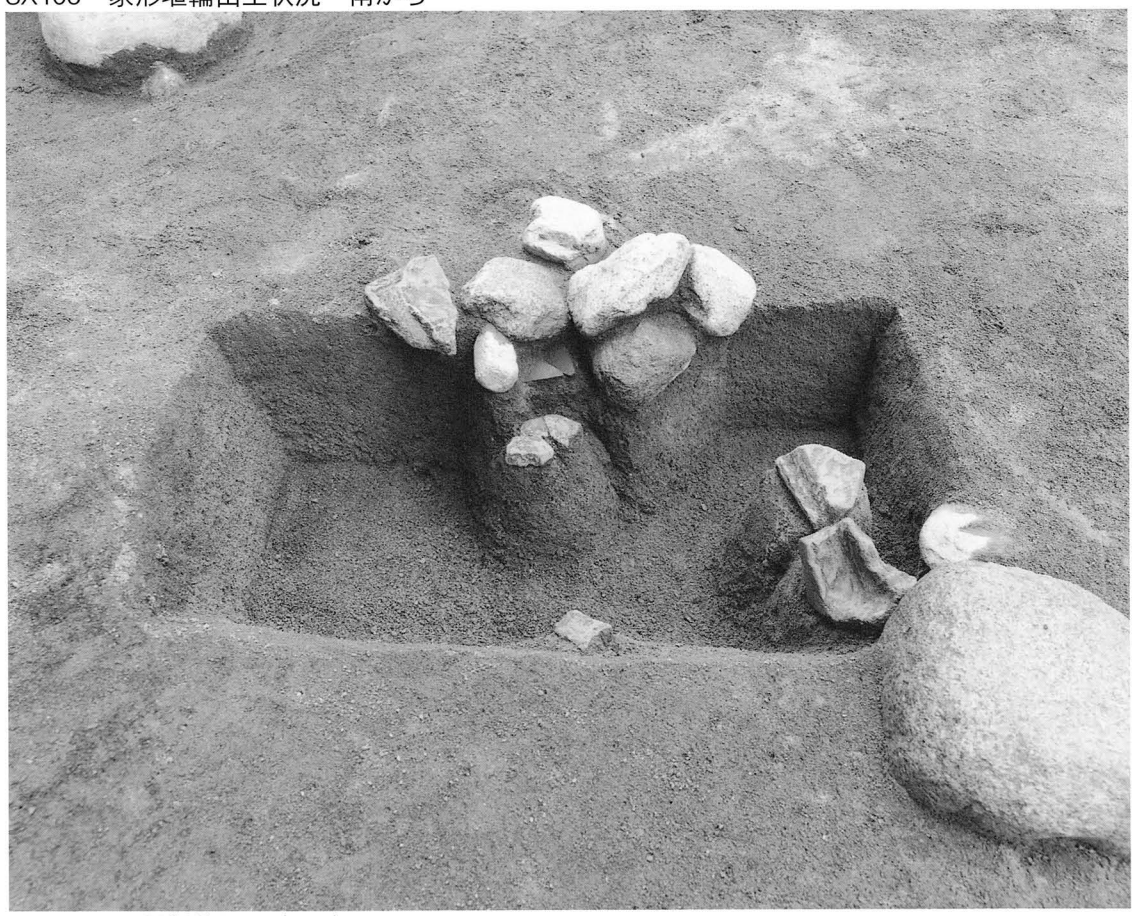
第１遺構面　全景　北から



第２遺構面　土石流　北から

第２遺構面　土石流　南から

SX103　家形埴輪出土状況　南から



SX103　同断割状況　南から

東辺周溝洪水砂堆積状況　北から

南辺周溝内転石堆積状況　東から

南辺周溝及び列石検出状況　東から

東辺周溝及び列石検出状況　南から

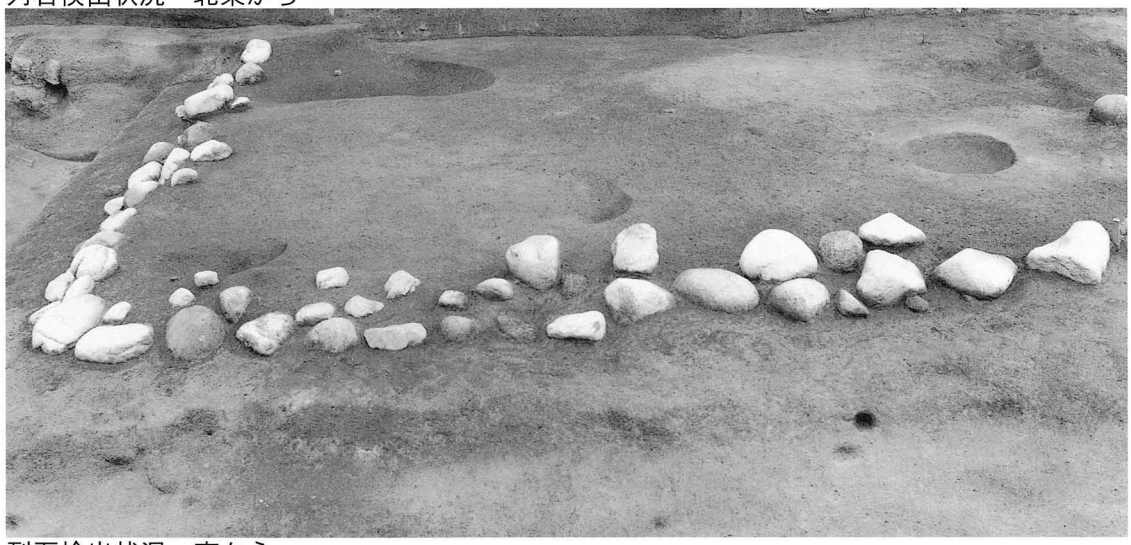
古墳南東隅部　北から

古墳南東隅部　南から

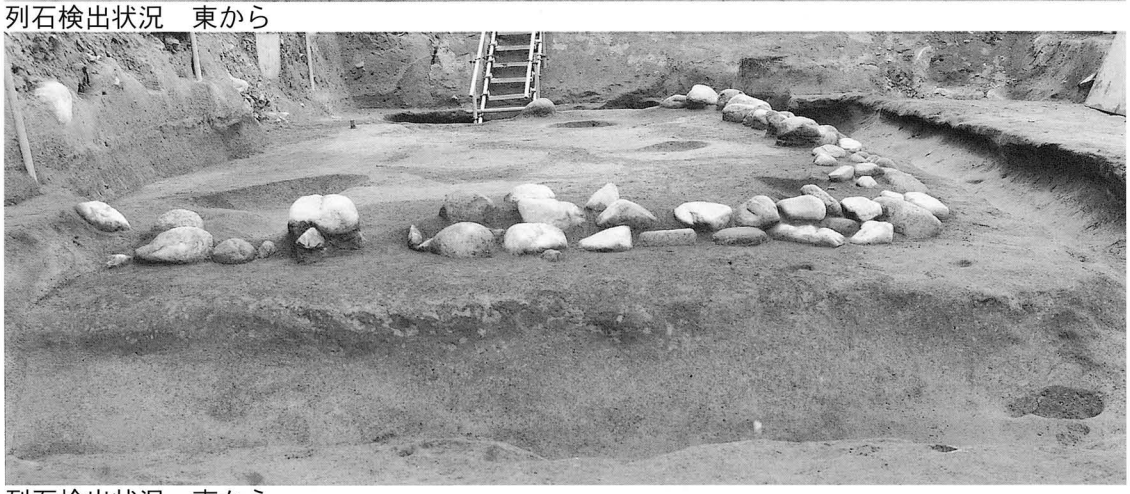
北辺周溝洪水砂堆積状況　東から

北辺周溝内須恵器杯出土状況　東から

列石検出状況　北東から



列石検出状況　東から



列石検出状況　南から

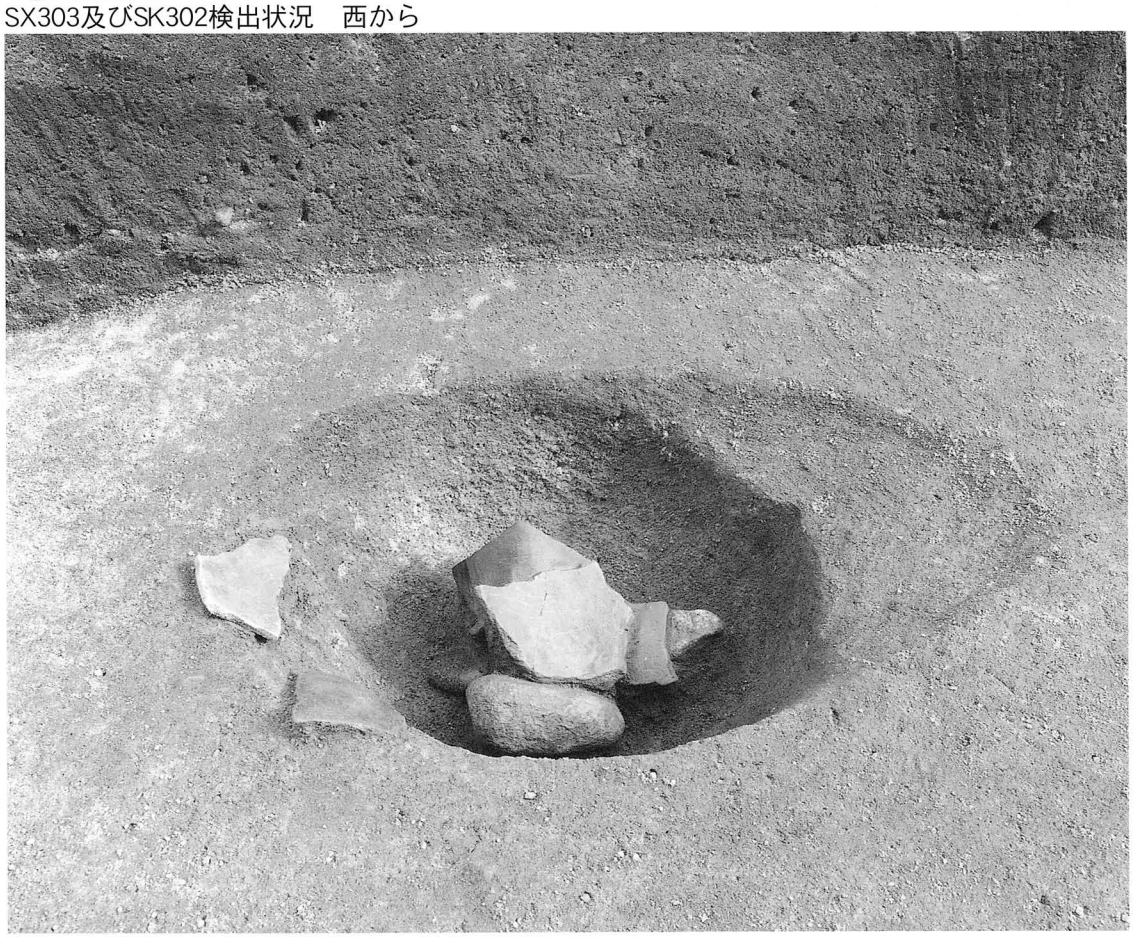
第３遺構面　全景　北から

第３遺構面　全景　南から

SX301検出状況　北から

SK301　遺物出土状況　西から

SX303及びSK302検出状況　西から



SK302遺物出土状況　西から

SD102遺物出土状況　北東から

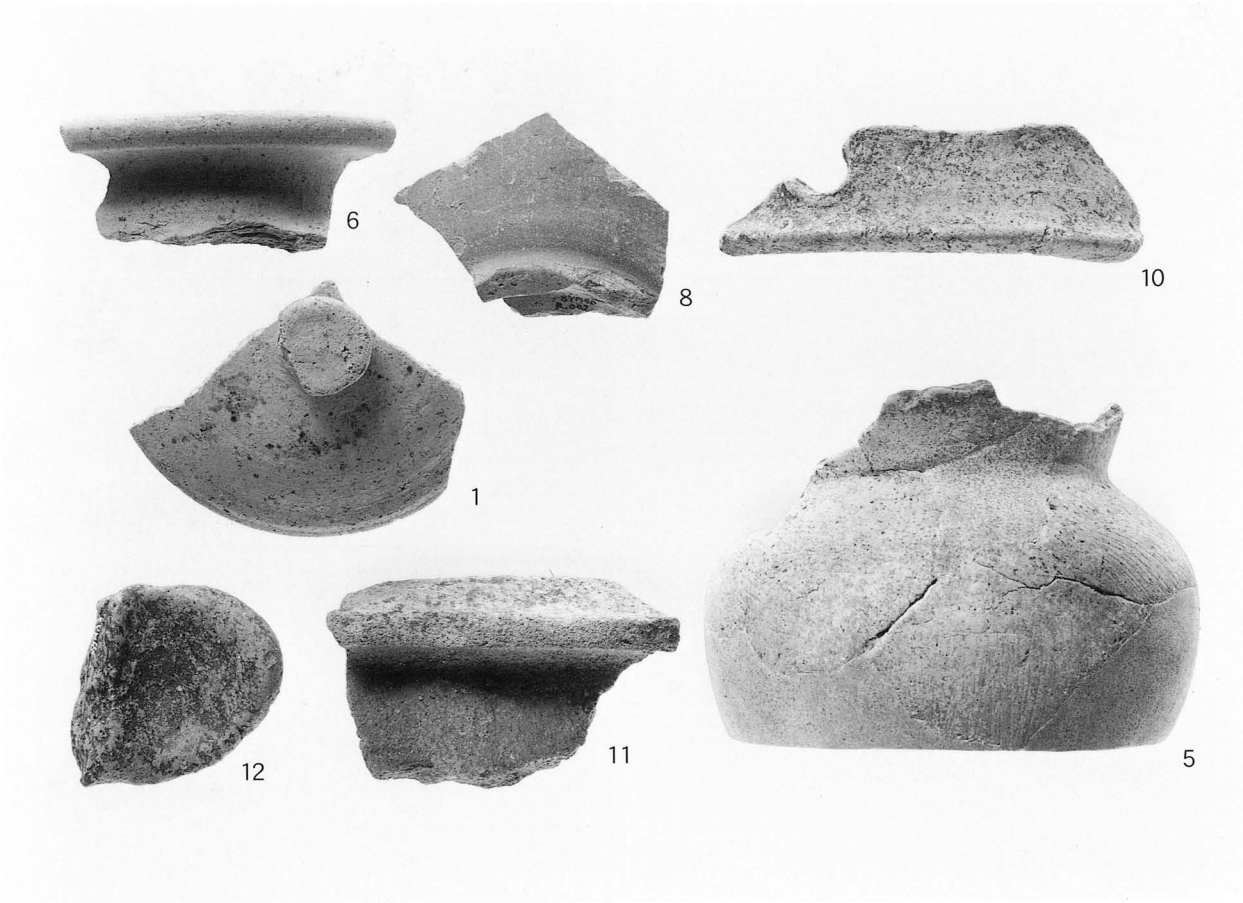
SX103瑙出土状況

墳丘上土坑検出状況　南東から

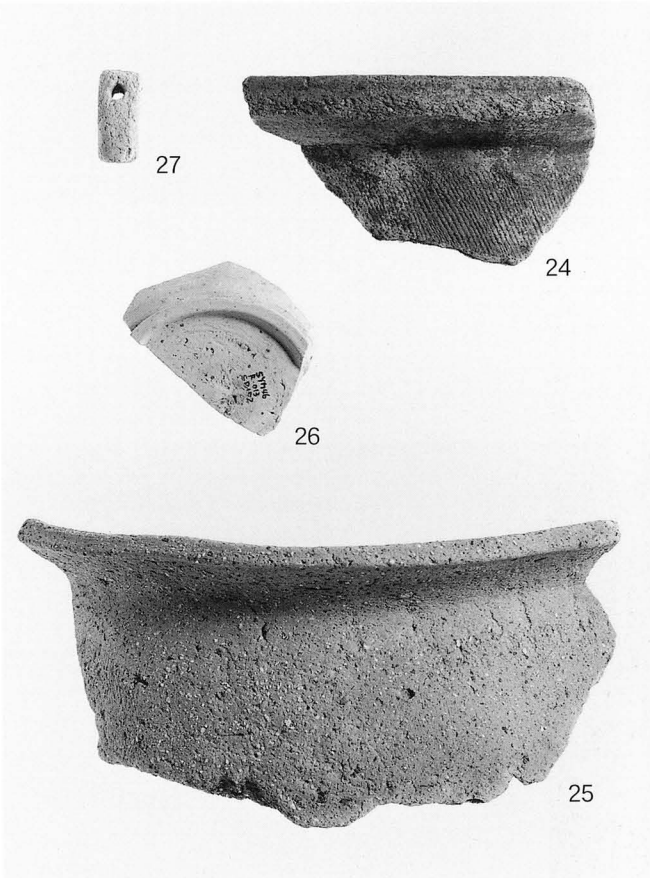
墳丘上土坑完掘状況　南東から

SX301　石錐出土状況

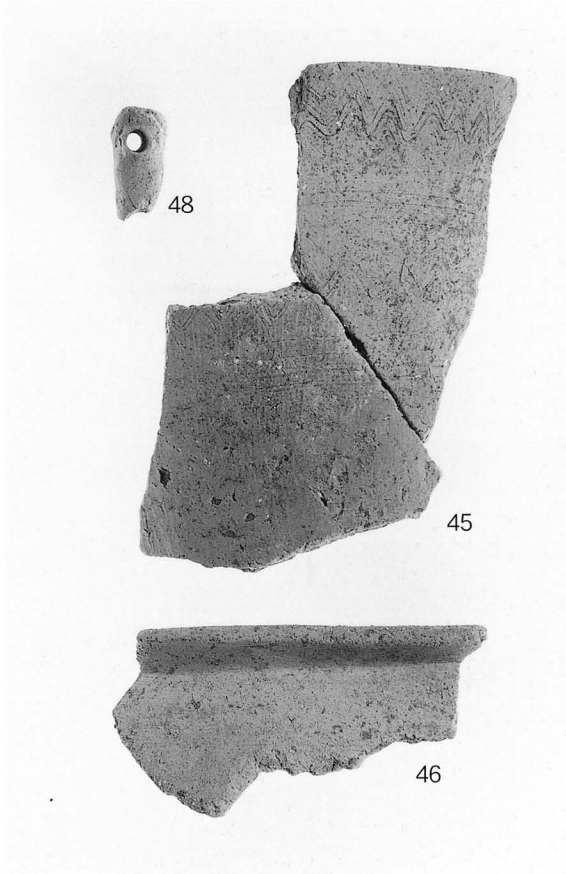
SX303　石鏃出土状況



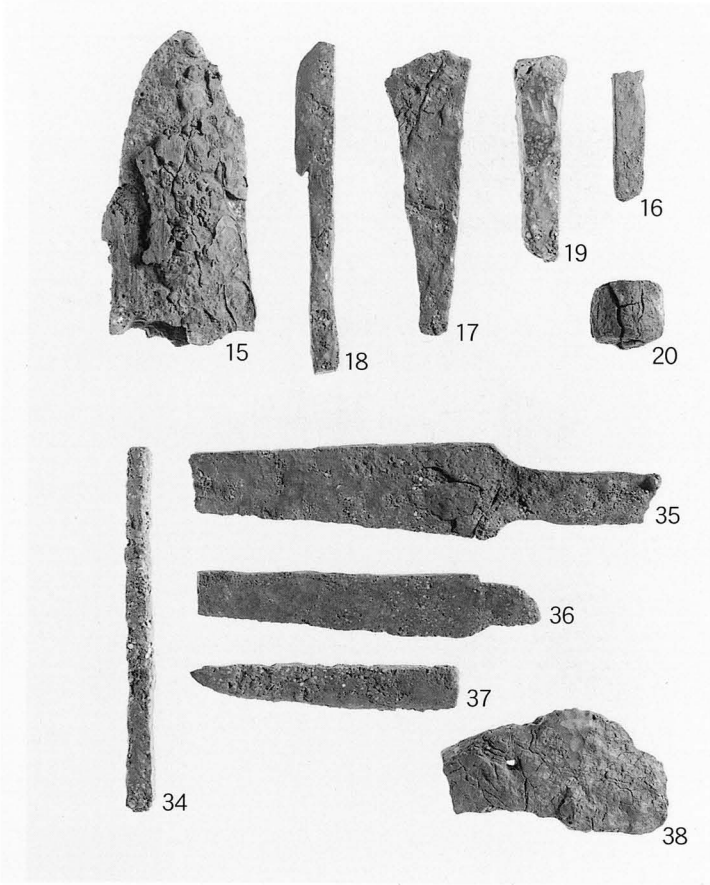

包含層１　出土遺物写真



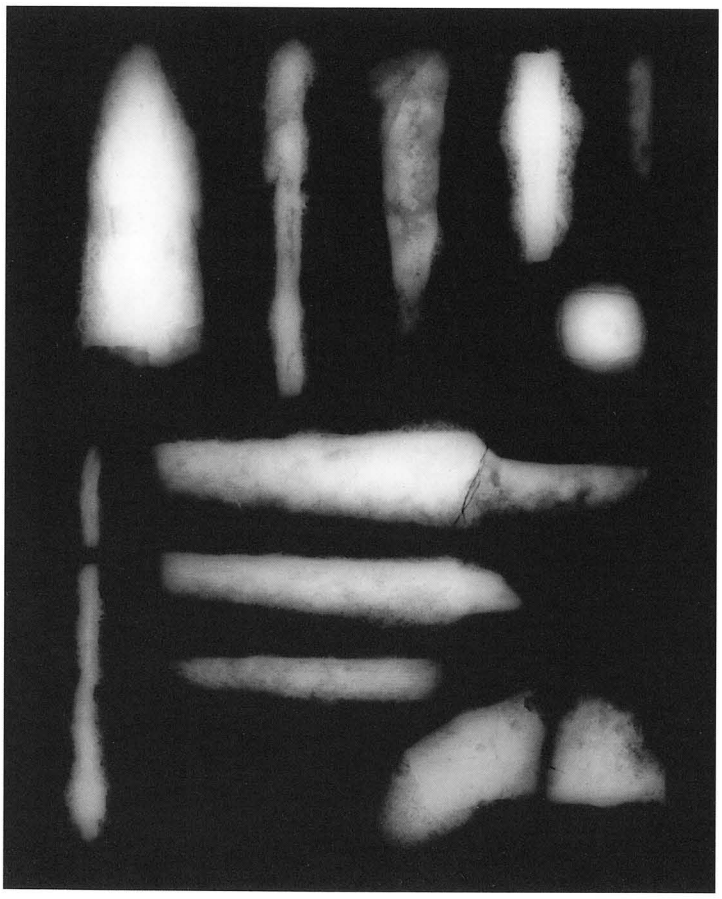

SD102　出土遺物写真




包含層２　出土遺物写真




出土鉄器類写真



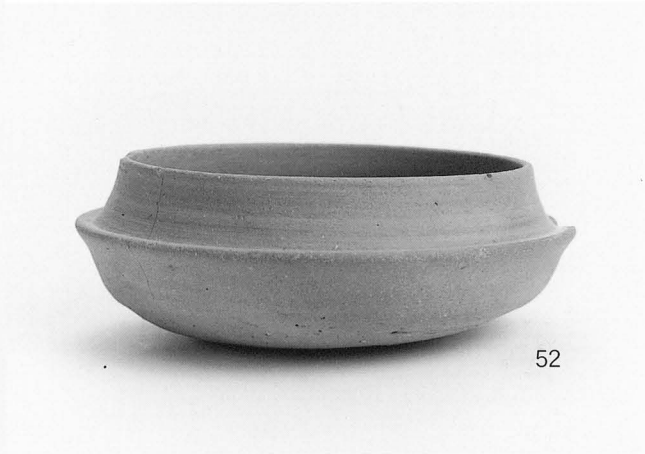
出土鉄器類レントゲン写真

SX102出土遺物写真

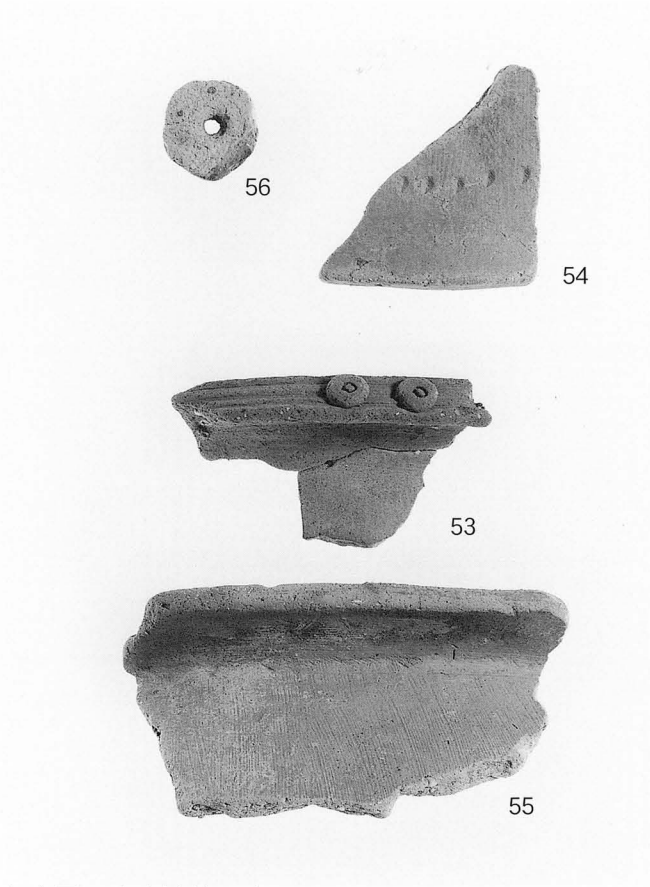
SX103出土遺物写真

SK201出土遺物写真

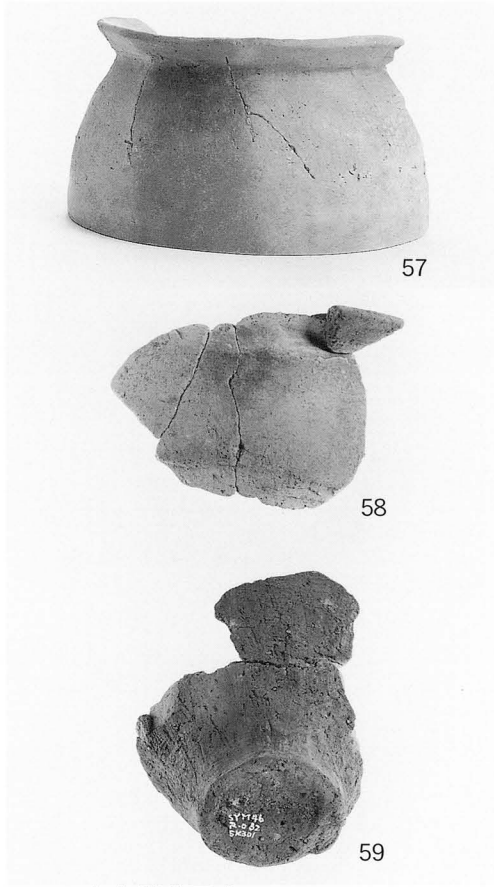
墳丘上土坑出土遺物写真



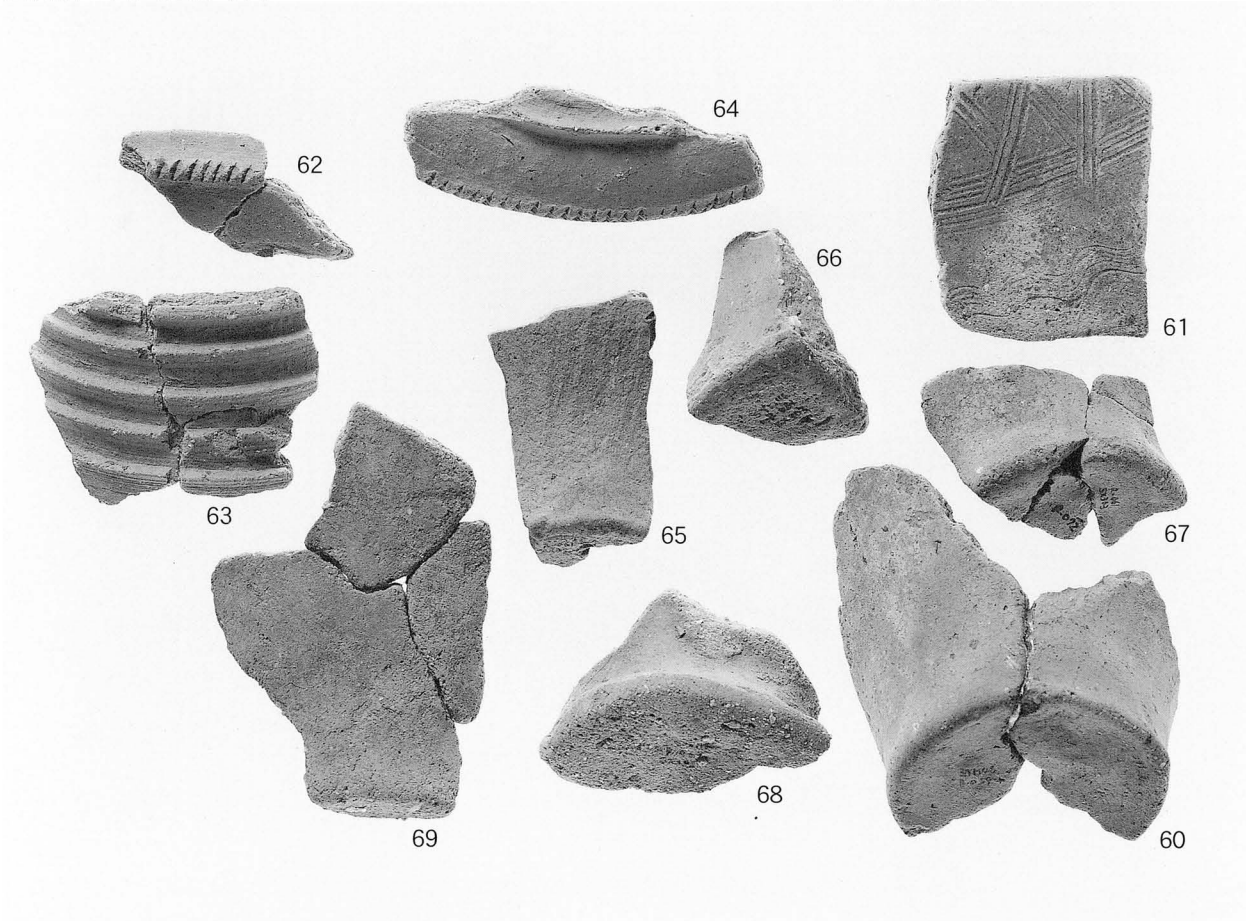

北辺周溝出土遺物写真




包含層３出土遺物写真



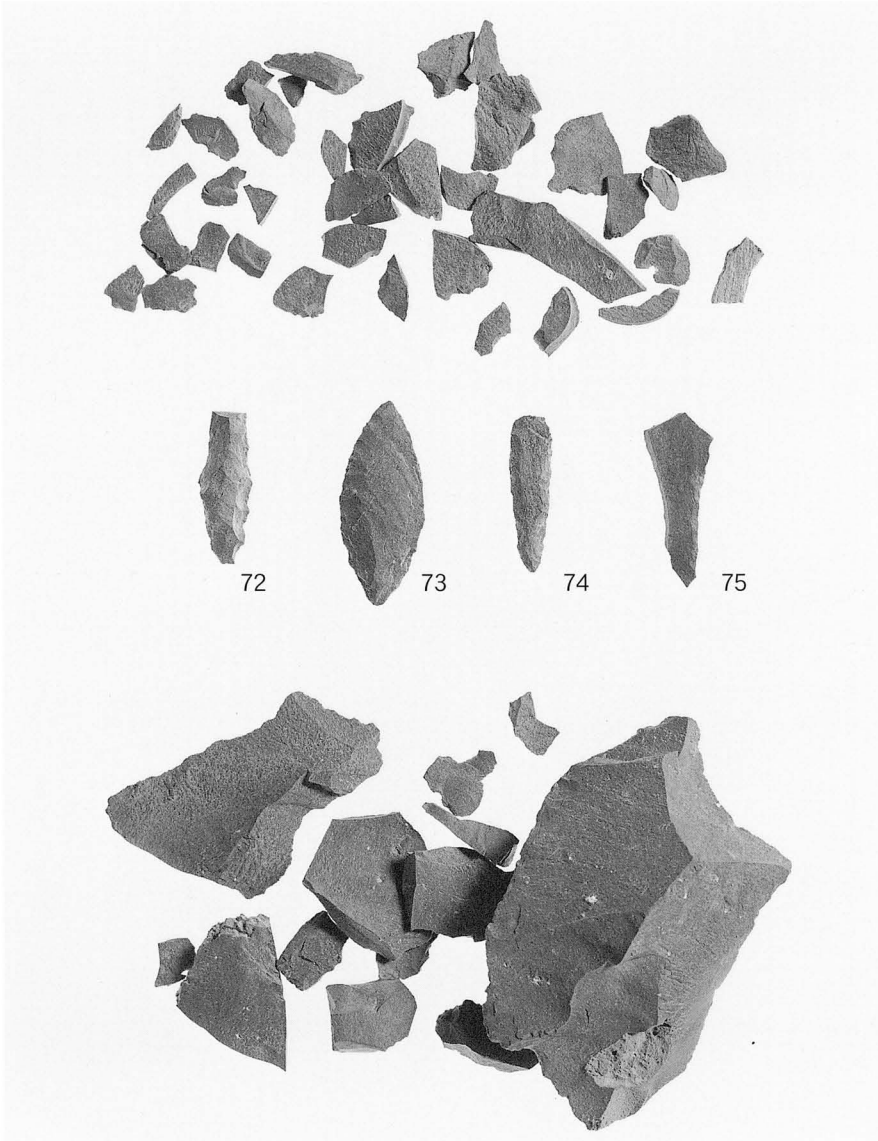

SK301出土遺物写真




SX303出土遺物写真（60：包含層３）

SK302出土遺物写真

SK302出土石器写真




第３遺構面出土石器写真

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | すみよしみやまちいせき　だい46じ　はっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 住吉宮町遺跡　第46次　発掘調査報告書 |
| 副書名 | 神戸市東灘区住吉宮町７丁目における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 口野博史 |
| 編者機関 | 神戸市教育委員会 |
| 所在地 | 〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町６丁目５番１号　TEL　078-322-6480 |
| 発行年 | 西暦2009年12月21日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 住吉宮町遺跡（すみよしみやまちいせき） | 兵庫県神戸市（ひょうごけんこうべし）東灘区住吉宮町（ひがしなだくすみよしみやまち）７丁目16、19-１番 | 28101 | 1-39 | 34度43分５秒 | 135度15分34秒 | 共同住宅建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 住吉宮町遺跡 | 集落跡 | 弥生時代<br>古墳時代<br>奈良時代 | 土坑、ピット、古墳、溝、落ち込み状遺構 | 弥生土器・土師器<br>須恵器・鉄器<br>埴輪・サヌカイト | |

要約

当調査では、弥生時代、古墳時代、奈良時代以降の３面の遺構面と遺物が確認された。弥生時代では、中期と後期の土坑、弥生土器とともに石鏃やサヌカイト剥片などが検出された。古墳時代の遺構面では、洪水砂に覆われた方墳が１基発見された。墳丘には列石が、周溝は北辺、東辺、南辺が確認されたが、その他の施設はなかった。住吉宮町古墳群での76基目の古墳となる。奈良時代以降の遺構面では、土坑、溝、落ち込み状遺構などが検出された。遺物は弥生時代から中世に及ぶが、洪水砂の中から古墳時代の剣の一部や家形埴輪片が出土した。

住吉宮町遺跡第46次発掘調査報告書

－神戸市東灘区住吉宮町７丁目における
共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2009.12.21

発行　神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570　神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL　078-322-6480

印刷　有限会社　岡印刷出版
〒652-0804　神戸市兵庫区塚本通３丁目１番25号
TEL　078-577-2243

神戸市広報印刷物登録・平成21年度　第202号（広報印刷物規格　A－６類）